

## 問題1

関白 豊臣秀吉に「徳川殿は何の宝をお持ちか？」と聞かれた家康公は、何が私の第一の宝と答えたのでしょうか？

- (1) 中国より渡来の、足利八代将軍 義政が命名した茶器「初花」
- (2) 伊勢国の刀職人が作り、妖刀ともいわれた名刀「村正」
- (3) 父祖伝来の地である「三河の山河」
- (4) 私のためなら命を惜しまない「家臣たち」

## 解説

「東照宮御実記」の中に記される有名なエピソードです。家康公は、「私はご存知のとおり三河の片田舎に生まれましたので、何も珍しい書画や調度品を貯えておりません。しかしながら、私のためには、水火の中に入っても命を惜しまない者が五百騎ほどおります。これこそ家康の身において第一の宝と思っています。」と答えました。秀吉はいささか恥じらった様子で、「そのような宝を私も欲しいものだ」と語ったと記録されています。

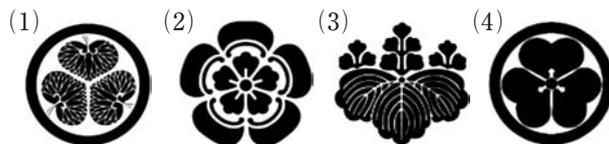


豊臣秀吉像(大阪城)

解答… (4)

## 問題2

家康公が用いた松平家、徳川家の家紋はどれでしょうか？



## 解説

「三つ葉葵紋」です。ただし、その由来に関してはいくつかの説が残されており、確かなことがわかっているわけではありません。松平三代 信光の肖像画や、所用の陣羽織の紋から「三つ葉葵」ではなく「三つ蓴」の家紋であったと考えられます。また七代 清康の肖像画からも同様の家紋が考えられます。三つ葉葵紋の原型は、昭和34年、岡崎城の発掘調査で示された「葉脈のない三つ葉葵」ではないかと考えられます。当時の調査記録では、「家康公が岡崎城主であった時代に考案されたもの」と記されています。



葵紋軒瓦(岡崎城)

解答… (1)

**問題3**

三河武士を代表する徳川四天王。その筆頭といわれるのは誰でしょうか？

- |                                       |                                     |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| (1) 井伊直政<br><small>い い なおまさ</small>   | (2) 酒井忠次<br><small>さかい ただつぐ</small> |
| (3) 榊原康政<br><small>さかきばら やすまさ</small> | (4) 本多忠勝<br><small>ほんだ ただかつ</small> |

**解説**

徳川四天王は、家康公の天下平定事業に大きな功績を残した家臣で、東照宮に合祀された最初の四名を指しています。年齢は酒井忠次が最も年長であり、家康公より15歳年上でした。家康公が駿府の今川氏のもとに人質として囚われている間、岡崎奉行衆の一人としてその留守を守っていました。今川義元からの信頼も厚かった様子が史料から明らかになっています。その後は家臣団の筆頭として吉田城主になりました。関ヶ原の合戦前に亡くなっていますので、忠次を除いた三人を「三傑」などと表現することもあります。



酒井忠次肖像画(知恩院塔頭 先求院/京都市)

**問題4**

今回の検定テーマは「家康公と三河武士たち」です。家康公と三河武士たちのふるさとであり活躍の舞台である“三河”とは、現在の何県でしょうか？

- |         |         |
|---------|---------|
| (1) 愛知県 | (2) 岐阜県 |
| (3) 静岡県 | (4) 三重県 |

**解説**

愛知県には古代から「三川国」(古事記)が存在し、中世初めころには「三河国」と表記されるようになっていました。矢作川と菅生川(乙川)、豊川の三本の川の存在からこのように呼ばれるようになったと伝えられますが、明確な根拠はありません。特に現在の東三河は「穂の国」とも表記されていましたが、律令制のもとで三河国府が設置されたことから、「三河国」となりました。愛知県の東側全域一山と川と海、豊かな自然に恵まれた三河国は、古代・中世を通して有力者が利権を争う地域になっていたことは間違いありません。



矢作古川(西尾市)

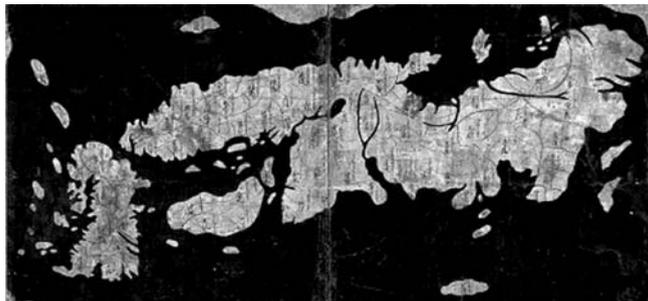
**問題5**

律令制では、日本は五畿七道の広域行政区画に分かれています。三河国はどの区画(道)に入りますか？

- (1) 東海道 (2) 東山道  
(3) 南海道 (4) 北陸道

**解説**

古代律令制における「五畿七道」とは、朝廷を中心とした行政区分の呼び方です。「五畿」とは「畿内」ともいい、大和、山城、摂津、河内、和泉の五国。現在の奈良県、京都府中南部、大阪府、兵庫県南東部を合わせた地域です。「七道」とは、東海道、東山道、北陸道、山陽道、山陰道、南海道、西海道の七道を指し、「五畿」を中心に放射状に広がる主街道でした。それぞれの街道は「国府」を結んだルートを形成していたと考えられています。三河国府は東海道のルート上にあっただと考えられます。



日本地図屏風(神戸市博物館)

解答… (1)

**問題6**

鎌倉に武家政権が樹立して約30年後、源氏の将軍が途絶えると、後鳥羽上皇は鎌倉幕府を倒そうと兵を挙げ、「承久の乱」が起こりました。このときの幕府の中心人物は誰だったのでしょうか？

- (1) 梶原景時 (2) 藤原泰衡  
(3) 北条義時 (4) 源実朝

**解説**

鎌倉幕府は源頼朝によって開かれた武家政権でしたが、源氏の血筋は三代目の実朝で途絶えてしまいます。これ以後、政治の実権を握ったのが、執権職にあった北条義時でした。京都の後鳥羽上皇はこの機に乗じて、政治の権力を院に取り戻そうとします。上皇は各地の武士たちに院宣(院の命令)を發し、鎌倉政権に対抗しようとするのですが、院側に従う武士は少なく、北条義時に従う軍勢は19万人に膨れ上がったとも伝わります。これは武士の社会的な地位を引き上げた鎌倉幕府への期待のほうに勝っていたということになります。



北条寺(伊豆の国市)

解答… (3)

**問題7**

承久3年(1221)、前問の「承久の乱」で活躍し、その恩賞として三河国の守護に任じられた足利義氏が、東国と西国の接点である西三河の支配力を強化するため一族を配置したのはどの川の流域でしょうか？

- |                                |                                 |
|--------------------------------|---------------------------------|
| (1) 木曾川<br><small>きそがわ</small> | (2) 菅生川<br><small>すごうがわ</small> |
| (3) 豊川<br><small>とよかわ</small>  | (4) 矢作川<br><small>やはしがわ</small> |

**解説**

矢作川流域は、特に西南部では古来から貴族や院の荘園が広がっていました。足利義氏は承久の乱での恩賞として、三河国守護とともに額田郡と碧海郡碧海荘、幡豆郡吉良荘の地頭職にも任じられ、矢作川流域の領主権を得たということになります。特に吉良荘(現在の西尾市域)と碧海荘(現在の豊田市上郷から岡崎市矢作地域及び六ッ美地域一帯)については、それぞれ九条家、後鳥羽院の荘園であり、義氏はこの地に一族を配することでその実質的な領主権を得ることになりました。



今川氏発祥の地(西尾市)

**問題8**

足利一門の中で、前問の川の流域に配置されていないのは何氏でしょうか？

- |                                |                                |
|--------------------------------|--------------------------------|
| (1) 今川氏<br><small>いまがわ</small> | (2) 吉良氏<br><small>きら</small>   |
| (3) 斯波氏<br><small>しば</small>   | (4) 細川氏<br><small>ほそかわ</small> |

**解説**

斯波氏は足利義氏の孫・家氏を祖とする一族で、代々、尾張守に任官したことから「足利尾張家」と呼ばれることもあります。この斯波氏の六代当主 義重が守護大名 大内義弘の室町幕府に対する反乱である「応永の乱」を鎮めた武功により、応永7年(1400)に尾張国の守護となり、その守護代に任じられたのが織田氏です。今川氏については足利義氏の子、西条吉良長氏の二男 国氏が今川荘を与えられて今川性を名乗ったのが始まりです。後に今川氏と織田氏の争いが戦国の世を大きく変える原点になるということも興味深いですね。



細川氏の墓(蓮性院/岡崎市細川町)

## 問題9

承久の乱から112年後の元弘3年(1333)、後醍醐天皇により鎌倉幕府は滅亡します。このとき、京の六波羅探題を攻めたのは足利尊氏でしたが、鎌倉攻めを行い北条氏を倒した徳川家の本家筋にあたる武将は誰でしょうか？

- (1) 足利直義 (2) 北畠親房  
(3) 楠正成 (4) 新田義貞

## 解説

足利氏も新田氏も、もともとは源義家を祖とする源氏の一族であった家柄です。しかし、北条氏執権のもとでは、足利氏は執事としての地位を与えられて重用されていた反面、新田氏は冷遇されていました。

後醍醐天皇による北条氏打倒の際には、新田義貞は官軍の大將として鎌倉攻めを行います。鎌倉の北条氏を倒した義貞は、京都で六波羅探題を攻め落とした尊氏とともに、後醍醐天皇による建武の新政に参画することになります。



新田義貞像(群馬県太田市)

解答… (4)

## 問題10

後醍醐天皇の「建武の新政」に反旗を翻した足利尊氏は一旦 京都を追われ、九州まで落ち延びますが、巻き返しを図り、湊川の戦い(兵庫県神戸市)で勝利します。このとき、豊後国(大分県)から従い、後に三河に入り、松平氏の譜代家臣となったのは何氏でしょうか？

- (1) 大友氏 (2) 酒井氏  
(3) 平岩氏 (4) 本多氏

## 解説

本多氏は藤原北家が祖であると伝えられますが、豊後国日高郡本多郷を領したことから本多を称するようになりました。南北朝時代、本多助定の代に九州まで落ち延びた足利尊氏の再起に従い京に上ります。尊氏が力を盛り返したのは、豊後国の守護であった大友氏などの協力があってからです。尊氏に従った本多氏は戦功で室町幕府の奉公衆となり、尾張横根郡と粟飯原郡の地頭となります。その後三河に移住したのです。



楠木正成自刃の場所(湊川神社/神戸市)

解答… (4)

**問題11**

建武3年(1336)、足利尊氏は京都に光明天皇を即位させますが、後醍醐天皇は吉野<sup>の</sup>に逃れたため、朝廷がふたつ存在する南北朝時代が始まり、この争乱の中で武士団の大移動がありました。このとき、現在の三河の豊田、岡崎、蒲郡<sup>がまごり</sup>の市域に移ってきた鈴木氏、鳥居氏、鵜殿<sup>うどの</sup>氏のルーツに共通する地域はどこでしょうか？

- (1) 伊賀国(三重県) 上野
- (2) 加賀国(石川県) 金沢
- (3) 紀伊国(和歌山県) 熊野<sup>くまの</sup>
- (4) 上野国(群馬県) 新田<sup>こうつけ</sup>

**解説**

鳥居氏は熊野権現の神職であったと伝わり、鎌倉中期(承久の乱以後)には、三河国矢作郷に来往したと伝えられます。また加茂郡(豊田市域)に移り住んだ鈴木氏は、熊野本宮関係の藤白神社の神職を務めていたと伝わり、宝飯郡(蒲郡市域)の鵜殿氏は熊野新宮の神職であったと伝えられます。いずれも南北朝の争乱に際し三河に移り住みました。



熊野本宮大社(和歌山県田辺市)

**問題12**

下野国(栃木県)宇都宮氏の後裔(子孫)といわれ、建武5年(1338)、新田義貞が越前国(福井県)で戦死すると、その首を持って三河国上和田郷に移り住んだと伝わる三河譜代の家は次のどの氏でしょうか？

- (1) 天野氏
- (2) 石川氏
- (3) 大久保氏
- (4) 米津氏

**解説**

関東の豪族 宇都宮氏の一族である宇都宮泰藤は、建武の新政から南北朝時代の初期にかけて新田義貞に従い各地を転戦しました。義貞が越前で戦死するとその首を持ち去り、三河国上和田郷<sup>けんとう</sup>に来往したと伝えられます。その際、現在の犬頭神社の一角に義貞の首を葬ったと伝えられ、その首塚が残されています。妙国寺(宮地町)を菩提寺とし、代々の墓が残ります。後に宇津(宇都)を名乗り、さらに大久保姓に改めて松平氏、徳川氏の重臣として仕えました。



新田義貞首塚(犬頭神社/岡崎市宮地町)

## 問題13

むろまち  
室町幕府が成立すると、足利家の執事の一族が三河守護になり菅生郷(岡崎市籠田町あたり)に館を構えますが、足利尊氏の弟 直義と対立した「観応の擾乱」により滅亡しました。この足利家の執事とは誰でしょうか？

- (1) 大島義高 (2) 吉良長氏  
(3) 高師直 (4) 仁木義長

## 解説

高氏はもともとは高句麗からの渡来人がその祖と伝わり、古代～中世初期においては高階氏を名乗っていました。高階氏は源義家の子義国とともに下野国に住み、以来、高氏を称して、義国の二男 義康(足利氏の祖)に仕えたのです。義康の孫の足利義氏が三河守護に任ぜられると、その被官として菅生郷、乙川上流の中山郷や日近郷を知行地としていました。観応の擾乱で一族が滅亡すると、師直の姪明阿により一族の菩提を弔うために「惣持尼寺」が創建されたのです。



高師直像(京都国立博物館)

## 問題14

おおおく ほひこぎ えもんただたか  
三河武士 大久保彦左衛門忠教によって書かれた大久保家の家訓の書で、松平八代と家康公、ならびに大久保一族を中心に、乱世を収め泰平の世の礎を築いた三河武士たちの歴史と功績を記した書を何というのでしょうか？

- (1) 徳川実記 (2) 松平記  
(3) 三河後風土記 (4) 三河物語

## 解説

大久保彦左衛門忠教は家康公、秀忠、家光と三代の将軍に仕えた三河武士です。三河物語は忠教が子孫に書き残した自伝的な書で、松平氏の発祥から家康公が天下人となり東照権現として祀られるまで、大久保一族の忠勤と自身の活躍を述べています。具体的で臨場感にあふれており、本家 大久保忠隣の改易以来、冷遇された大久保一族の不遇を嘆きながらも、将軍への忠勤を子孫に説くなど、当時の武士の思想や世界観を知る上で貴重な史料となっています。



大久保彦左衛門(錦絵)

## 問題15

家康公の先祖、世良田有親・親氏父子を兎の吸物でもてなした縁で、後に親氏から松平郷に侍大将として信州(長野県)から呼びよせられ、幕末の戊辰戦争では最後まで新政府軍に徹底抗戦した上総国請西藩主の家は何氏でしょうか？

- (1) 青山氏 (2) 大岡氏  
(3) 高力氏 (4) 林氏

## 解説

兎汁の逸話で有名な林氏は、信濃林城を築いた小笠原清宗二男の林光政を始祖としています。代々、旗本直臣として将軍家に仕えていましたが、十一代将軍 徳川家斉の時代、林忠英の代に上総国貝淵藩一万八千石の大名に取り立てられました。子の忠旭の代に陣屋を移して請西藩となります。幕末、請西藩三代 忠崇は、藩主でありながら自ら脱藩し、藩士を率いて旧幕府軍として戊辰戦争に参戦します。そのため林家の請西藩は、明治新政府により改易された唯一の藩となったのです。



林光政雪中に兎を狩る図  
〔「善光寺道名所図会」挿絵〕

## 問題16

松平初代 親氏が婿養子に入った松平太郎左衛門家の当主や親氏は、その活動から有徳人と呼ばれますが、主にどのような活動をしたのでしょうか？

- (1) 武器の使い方や戦い方などの兵法指導活動  
(2) 農作物の品種改良や新農法の普及などの農業振興活動  
(3) 道の造成・維持や寺社の勧請などの地域貢献活動  
(4) 金貸しなどの金融活動や人足手配などの人材派遣活動

## 解説

松平親氏が婿養子に入ったとされる松平郷松平家は、史料によりその出自が異なっています。近年では富貴な「有徳人」の家柄であったとされていますが、特に親氏が急速に勢力を広げることができたのも、経済的に豊かであったことが理由の一つとして挙げられています。親氏の家臣たちは交渉術に長け、近隣の整備をしながらその勢力範囲を広げていったのでしよう。



木造 松平親氏座像  
〔松平郷館／豊田市〕

**問題17**

親氏の子、あるいは甥おいの広親ひろちかが初代といわれ、譜代家臣ひつとうの筆頭に数えられる代表的な家臣は何氏でしょうか？

- (1) 井伊氏                      (2) 酒井氏  
(3) 榊原氏                      (4) 本多氏

**解説**

酒井氏の出自については、いくつかの説があり確証がありません。一つには、大浜(碧南市)から西尾の坂井郷を訪れた親氏が、在地の有力者の娘との間に子をもうけ、その子が後に酒井広親になったという説。今一つは、親氏が婿養子に入った松平太郎左衛門家の義姉が、岩津一帯を治めていた酒井氏に嫁ぎ、生まれた子が酒井広親で、後に親氏に仕えるようになったという説。いずれの説も確証に乏しいのですが、松平郷松平家の家老 神

谷家に伝わる「松平氏由緒書」によれば後者の説が記されています。広親の石宝塔(岡崎市指定文化財)が岩津地内に残されています。



酒井広親石宝塔(岡崎市岩津町)

**問題18**

松平初代 親氏の時代に家臣になったといわれ、子孫は犬山城主として明治を迎えたのは何氏でしょうか？

- (1) 内藤氏                      (2) 長坂氏  
(3) 成瀬氏                      (4) 平岩氏

**解説**

先祖は三河国加茂郡足助庄成瀬郷に居住したと伝わりますが、詳しいことは不明です。成瀬氏は松平初代の親氏に仕え、安城城に入った松平四代 親忠に仕えて岡崎の六名郷むつなに領地を得たと伝わります。犬山城主になる正成まさなりは、幼少より家康公に仕え、17歳の時に長久手の合戦つげがらうで初陣を果たしました。後に尾張徳川家の「付家老」となりますが、これは将軍家直臣という立場での家老職であり、大名格として扱われたのです。尾張家では他に竹腰家(美濃今尾藩)や渡辺家(加茂寺部藩)などが付家老に任じられています



犬山城主守(犬山市)

## 問題19

松平二代 泰親やすちかが山間部の松平郷ようから進出した要衝しゅうの地はどこだったでしょうか？

- (1) 安城城 (2) 岩津城  
(3) 西尾城 (4) 山中城

## 解説

諸説ありますが、松平二代 泰親は親氏の弟と考えられています。親氏は泰親を幼い二人の子供(信広、信光)の後見人にしていたのでしょう。二人が成長すると、泰親は二人を伴って松平郷から岩津の地に勢力を拡大すべく、岩津大膳城の中根氏を討伐したと伝わります。その際、信広は足を負傷したので松平郷に返し、信光と共に大膳城に入ったと思われます。その位置には現在、若一王子社じしやがありますが、創建を示す棟札には泰親を示す名おおだんな(大檀那松平用金ゆうきん)が記されています。岩津城の築城はこれ以降になり、信光の手によるところが大きいのではないかと考えられます。



岩津城址土橋(岡崎市岩津町)

解答… (2)

## 問題20

地域領主への転換をめざし、泰親は室町幕府の要職ように就く伊勢貞親いせさだちかの被官ひかんとなります。松平氏つかが仕えた伊勢貞親の役職は何だったでしょうか？

- (1) 管領かんれい (2) 侍所頭人しゆかどこうとうにん  
(3) 執権しつけん (4) 政所執事まんどこうしつじ

## 解説

もともと額田郡の大部分は、足利將軍家の直轄領(御料所)でした。伊勢貞親は幕府政所執事として、この地域の管理を行っていたものと思われます。泰親はこの伊勢氏の被官となることで、この地域での影響力を強める結果となりました。岩津城に進出した泰親は、城の周囲に七つの城を構え(岩津七城)、実質的な国人領主としての地位を得ます。伊勢氏はもともと桓武平氏の流れをくむ名家であり、貞親は足利八代將軍 義政に仕えて政所執事として幕府財政の立て直しを成功させました。將軍からの信頼も厚く、その被官であった泰親の子 益親ますちかは遠く京都や近江国まで活動範囲を広げたと理解できる史料が残されています。



政所執事伊勢貞国  
(貞親の父・東大史料編纂所)

解答… (4)

## 問題21

泰親の時代に家臣になったといわれる室町幕府の奉公衆の一族で、「立ち葵」を家紋とするのは何氏でしょうか？

- (1) 服部氏 (2) 久松氏  
(3) 本多氏 (4) 渡辺氏

## 解説

足利尊氏の再起に従った豊後国出身の本多氏は、室町幕府奉公衆となり、尾張横根郡と粟飯原郡の地頭となります。幕府奉公衆とは將軍直属の武士で、江戸時代でいえば上級旗本のような存在でした。もともとは守護大名や有力国人衆、鎌倉幕府の有力御家人などが引き続きその職に就きましたが、全国でおよそ300家余りが奉公衆として存在したとされています。三河国は足利氏にとって重要な拠点でもあったことから、全国最多のおよそ40家が存在していました。奉公衆であった本多氏が家臣になったことは、松平氏にとって大きな出来事だったと言えます。



立ち葵紋

解答… (3)

## 問題22

寛正6年(1465)、三代信光の時代に西三河の額田郡を中心に「額田郡一揆」が起こります。一揆を起こしたのはどのような人々だったのでしょうか？

- (1) 浄土真宗本願寺派の僧侶や信者の武士、農民たち  
(2) 悪政と飢饉に耐えられなくなった農民たち  
(3) 元室町幕府の奉公衆や足利一族の被官だった武士たち  
(4) 元南朝に仕えていた武士たち

## 解説

室町中期になると、三河国内ではもともと吉良氏の被官衆であった武士たちが不穏な動きをするようになりました。これは西条家と東条家に分かれていた吉良氏の対立がもとで、被官衆がどちらの命令も聞かなくなったことが原因だと考えられます。特に大場氏、梁田氏は奉公衆の丸山氏と共に、岡崎の井ノ口に砦を築き、物資の略奪などの狼藉を働きました。伊勢氏の命によって松平氏と戸田氏が鎮圧に動いたとされています。



井ノ口砦跡(岡崎市井ノ口町)

解答… (3)

**問題23**

一揆を起こした者のなかに、後に松平家の譜代家臣になる者がいました。家康公の代に三河三奉行のひとりに取り立てられ、「**仏〇〇**」と称されたこの三河武士は何氏でしょうか？

- (1) 天野氏                      (2) 板倉氏  
(3) 高力氏                      (4) 本多氏

**解説**

高力氏はもともと東三河の八名郡に居住していましたが、後に高力郷(幸田町高力)に移り住んだと伝えられます。この地域は深溝(幸田町深溝)の大場氏を中心とする武士たちの結びつきがあったのでしょう。高力氏も一揆衆に加わりましたが、一揆終結後に松平家臣となりました。高力清長は広忠、家康公と仕え家康公の三河統一の過程で三河三奉行の一人に取り立てられ、「**仏高力**」と呼ばれました。

後には武蔵国岩槻城主。豊臣秀吉に重用され、聚楽第建設の普請奉行をしたことでも知られています。



高力神社(城跡)／額田郡幸田町

**問題24**

幕府の命令を受けて、松平氏とともに一揆の鎮圧を行い、恩賞として東三河渥美半島の田原に新たな所領を得た、後の譜代家臣は何氏でしょうか？

- (1) 奥平氏                      (2) 設楽氏  
(3) 戸田氏                      (4) 水野氏

**解説**

額田郡一揆は、当初は三河守護の細川氏に鎮圧が命じられました。細川氏は元 仁木氏の守護代を務めた有力国人の西郷氏などに出兵を命じますが、井ノ口砦の大將を取り逃がすなど、鎮圧には至りませんでした。幕府政所執事であった伊勢氏は被官である松平信光、その縁戚でもある戸田氏に出兵を命じます。彼らは一揆を鎮圧し、その恩賞として信光には西三河、東三河の一部(宝飯郡)に領地を与えられました。戸田氏は渥美半島一帯を与えられ、その勢力を拡大したのです。



田原城外堀(田原市)

## 問題25

「額田郡一揆」鎮圧の結果、松平氏は西三河だけでなく、東三河の宝飯郡にも幕府から所領を得て、各地に一族を分立させ支配権を拡大しましたが、宝飯郡のうちで所領を得た、形原、竹谷、五井は現在の何市に位置するのでしょうか？

- (1) 蒲郡市 (2) 新城市  
(3) 豊川市 (4) 豊橋市

## 解説

松平信光が一族を分立させたきっかけは、額田郡一揆の恩賞でした。岩津家は宗家になります。その他に形原、竹谷、五井、長沢(以上宝飯郡)、大草、宮石、能見(額田郡)、安城(碧海郡)に分立させました。形原、竹谷、五井は現在の蒲郡市に存在します。同じ宝飯郡でも長沢は現在の豊川市です。宮石は現在の岡崎市宮石町です。また、これ以外に大給、深溝、牧内を信光分家に入れて考える場合もあります。



長泉寺山門(五井城城門)／蒲郡市

解答… (1)

## 問題26

一揆終結後の応仁元年(1467)、京都で起こった「応仁の乱」の三河への波及に対応し、松平三代 信光はどのような行動をとったのでしょうか？

- (1) 中立を保ち、額田郡一揆の鎮圧で得た所領を守った。  
(2) 東軍として、西軍の一色氏側の畠山氏が守る安城城を攻略した。  
(3) 西軍として、東軍の西条吉良氏の西条城を攻略した。  
(4) 東軍、西軍に関わらず、混乱に乗じて西三河の国人衆を攻め、従わせた。

## 解説

信光が攻略した際の安城城の城主については、江戸時代の史料(東照宮御実記)には「畠山加賀守某」と記されます。この畠山氏は足利将軍家の奉公衆とも記されますが、志貴荘(安城から大浜(碧南市)にかけての地域)の地頭ではなかったかと思われます。いずれにしろ確証となる史料に乏しく、応仁の乱とどのように関わっていたのか、今後の研究が待たれます。



安城城址(安城市)

解答… (2)

## 問題27

信光が、息子(五男)の光重<sup>みつしげ</sup>を、元 守護代の国人領主 西郷氏<sup>むこようし</sup>の婿養子に入れることで手に入れた城はどこでしょうか？

- (1) 岡崎城 (2) 挙母城<sup>ころも</sup>  
 (3) 東条城<sup>とうじょう</sup> (4) 吉田城

## 解説

現在の岡崎城は、細川成之<sup>しげゆき</sup>が三河守護を務めた享徳元年(1452)、または康正元年(1455)に元守護代であった西郷氏が菅生川北側台地の龍頭山に「砦」として築いたものです。当時、西郷氏は菅生川の南に居館を構えていたとされ、松平氏の勢力拡大に備えての砦の造営だったのでしょう。その居館も「岡崎城」と呼ばれていたかどうかは不明です。松平光重の時代から「岡崎松平氏」と呼ばれるようになりますが、それは後世に名付けられたものと考えてよいでしょう。



岡崎城最古の青海堀(岡崎市康生町)

解答… (1)

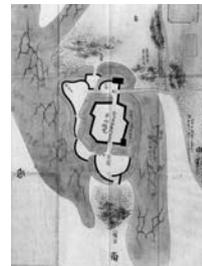
## 問題28

四代 親忠<sup>ちかただ</sup>が、父 信光<sup>ゆず</sup>から譲られて居城とした城はどこでしょうか？

- (1) 安城城 (2) 岩津城  
 (3) 岡崎城 (4) 刈谷城<sup>かりや</sup>

## 解説

松平信光が安城城を奪い取ったのは文明3年(1471)のこととされています。夏の夜、安城城の近くで、笛、太鼓、鉦を打ち鳴らし「念仏踊り」に興ずる一団が舞い踊り、多くの村人が見物に集まっていたといえます。この日、祭りがあるとの噂を聞いていた城兵は物珍しさに城を空けて祭りを見に行きました。そこに、武装した信光の兵が空になった城に攻め入り、無血落城させたのです。祭りの噂を流したのも、踊りの集団を仕立てたのも信光で、奇計をもって安城城を奪取したとの伝承が残ります。このころ、安城初代とされる親忠は伊賀八幡宮と大樹寺を創建する大事業に取り組んでおり、岡崎市の鴨田、井ノ口あたりに居館を構えていたと考えられます。松平四代 親忠は、この後、安城城を父 信光から譲られ、以降四代にわたって安城城は松平家の居城となりました。



諸国古城之図「安城」  
(広島県浅野文庫)

解答… (1)

## 問題29

文明<sup>ぶんめい</sup>2年(1470)、親忠<sup>うじがみ</sup>が一族の氏神として創建した神社で、後に家康公も初陣<sup>ういじん</sup>の参詣<sup>さんけい</sup>を吉例<sup>きちれい</sup>に、以後、大きな合戦の際には必ず戦勝を祈願<sup>きがん</sup>したとの逸話<sup>いつわ</sup>が残る神社はどこでしょうか？

- (1) 伊賀八幡宮 (2) 岡崎天満宮  
(3) 瀧山東照宮 (4) 新田白山神社

## 解説

親忠が伊賀八幡宮を創建したのは文明年間に入ってからと考えられています。京都で応仁の乱<sup>ぼんぼつ</sup>が勃発したのが応仁元年(1467)、その少し前には額田郡一揆が井ノ口砦<sup>かんこう</sup>を中心に起きていました。井ノ口砦は古代からの「井ノ口環濠集落」の北端にあり、親忠も同じ地内に居館を構えていたと思われる。親忠は父 信光と共にこの一揆と戦い、この地域における一族の領主権を守ったのでしょう。その一つの象徴として伊賀八幡宮が創建されたと考えても良いでしょう。



伊賀八幡宮本殿「宮殿」(国重文／岡崎市伊賀町)

## 問題30

文明7年(1475)、親忠は福林寺(豊田市)の住職勢誉愚底<sup>せいよぐてい</sup>を開山に、一族の菩提寺<sup>ぼだいじ</sup>として寺院を創建しました。何という寺院でしょうか？

- (1) 高月院<sup>こうげついん</sup> (2) 西光寺<sup>さいこうじ</sup>  
(3) 大樹寺<sup>だいじゅじ</sup> (4) 法蔵寺<sup>ほうぞうじ</sup>

## 解説

大樹寺の創建については、応仁年間に起きた「井田野合戦」の戦死者の霊を弔うためとされています。ただ、「開山式定」にはそのことが記されることはなく、松平宗家の菩提を弔うための、一族の菩提寺としての性格が強かったとも考えられています。開山の勢誉愚底上人は、もともとは京都で生まれ、浄土宗の僧となって福林寺(豊田市<sup>うねべ</sup>畝部町)の住職となりました。このころに松平親忠をはじめ一門の篤い帰依を受け、大樹寺の開山となります。この後には知恩院の第二十三世となりました。「大樹」という寺名は「將軍」という意味で、勢誉愚底によって命名されました。



勢誉愚底(大樹寺／岡崎市鴨田町)

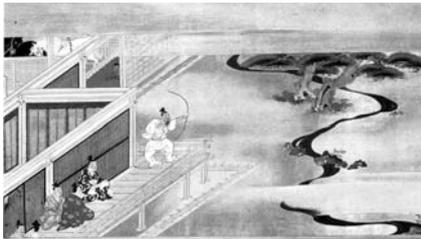
## 問題31

親忠の代に仕え、碧海郡小川(安城市小川町)を本拠にした一族で、三河の浄土真宗本願寺派(一向宗)門徒の総代的な立場にもあったといわれるのは何氏でしょうか？

- (1) 安藤氏 (2) 石川氏  
(3) 夏目氏 (4) 本多氏

## 解説

三河石川氏は先祖が源義家の子 義時(河内源氏)と伝えられますが、定かではありません。一説には、浄土真宗本願寺派第八世宗主の蓮如上人が応仁年間に三河に来往した際に従い、それ以後、碧海郡小川に定住し安城松平氏に仕えたと伝えられています。家康公の父 広忠の重臣であった石川清兼は、浄土真宗本願寺派(一向宗)の武士のリーダーとして、同派寺院である本證寺(安城市野寺町)連判状の筆頭にその名前を記しています。清兼の子が家成、家康公の重臣として最初の西三河旗頭となりました。また家成の甥がかずまさ数正であり、徳川創業期に家康公の重臣として活躍しています。



石川清兼の墓目の矢(東照社縁起巻一)

## 問題32

松平五代 長忠(長親)のとき、駿河守護の今川氏親と叔父の伊勢宗瑞の軍が三河に攻め入り、惣領家(宗家)の岩津松平氏が壊滅的な打撃を受けました。岩津松平氏に代わり、奮闘した長忠が台頭してゆくきっかけともなったこの戦を何というのでしょうか？

- (1) 小豆坂の合戦 (2) 永正三河の乱  
(3) 三州錯乱 (4) 矢作川の戦い

## 解説

今川氏親と叔父の伊勢宗瑞は、もともと遠江国の斯波氏を巻き込みながら、東三河への進出を図っていました。東三河では宝飯郡の西部(豊川市)と渥美郡の北部(豊橋市)への勢力拡大を図る牧野氏が今橋城(吉田城)を構えて田原の戸田氏と争っていましたが、戸田氏の計略で今川氏の軍勢は今橋城を攻め落としました。その後、西三河で勢力を拡大していた松平氏を攻めるために、今橋城を拠点に東三河の軍勢を中心に攻め寄せたのが永正三河の乱と呼ばれる争い입니다。永正3年(1506)から同5年(1508)にかけて繰り広げられた大きな乱でした。



吉田城の虎口(豊橋市)

**問題33**

前問の三河侵攻で今川軍を指揮した伊勢宗瑞は、後に戦国大名の先駆けとも称されます。伊勢宗瑞とは誰のことでしょうか？

- (1) 上杉憲政 (2) 太田道灌  
(3) 武田信虎 (4) 北条早雲

**解説**

伊勢宗瑞は少し前までは伊勢新九郎長氏という名で知られていましたが、近年では宗瑞の名が信憑性の高い史料で認められるようになりました。松平泰親や信光が被官として仕えた、政所執事 伊勢貞親の甥(他説あり)で、高い身分であったと考えられています。今川氏親の母親はこの伊勢宗瑞の妹にあたり、宗瑞は幼い氏親の後見人として行動を共にしていました。後に伊豆国や相模国を支配し、戦国大名 北条早雲として有名になりますが、この名は宗瑞の死後に二代目の北条氏綱によって付けられたとされています。



伊勢宗瑞画像(小田原城/小田原市)

解答… (4)

**問題34**

前問の戦いで酒井氏・本多氏・大久保氏らとともに奮闘し、子孫は丹波篠山藩(兵庫県)と美濃郡上藩(岐阜県)の藩主で明治を迎えた一族で、関東移封後に家康公から拝領した広大な敷地跡の地名にその名を残す三河武士は何氏でしょうか？

- (1) 青山氏 (2) 渋谷氏  
(3) 品川氏 (4) 内藤氏

**解説**

青山氏は南北朝時代に後醍醐天皇の孫である尹良親王に仕え、上野国青山郷(群馬県吾妻郡青山)に居を構えていました。その地名から「青山」と名乗っており、これが青山姓のルーツと考えられます。後に額田郡の百々(岡崎市百々町)に城を構えますが、南北朝争乱の影響を受けてのことでしょう。「安城七譜代」の一人に挙げられています。四代親忠の時代には松平氏の家臣となっていたと考えられます。



青山忠成顕彰碑(百々城址/岡崎市百々町)

解答… (1)

## 問題35

松平六代<sup>のぶただ</sup> 信忠は、江戸時代の書物では神仏をないがしろにした人物とされます。しかし岡崎市のある寺には、信忠の剃髪した姿が描き込まれた珍しい涅槃図が所蔵されており、信忠の信仰の一端を伝えています。この涅槃図がある寺院はどこでしょうか？

- (1) 信光明寺 (2) 大樹寺  
(3) 知恩院 (4) 妙心寺

## 解説

六代 信忠は、「松平氏由緒書」によれば、強引な性格であり、神仏祭礼を行わず、仁義礼智といった徳目に従わなかったことなどが家臣離反の原因であるとしています。三河物語では、信仰心の薄い、暗愚な武将として描かれますが、これは英雄視される子の清康と対比させて描かれた恣意的なものでしょう。大樹寺に残された「涅槃図」には剃髪した信忠が「泰孝」の法名で描かれ、信仰心の篤かったことを示しています。



信忠画像  
(涅槃図・大樹寺／岡崎市鴨田町)

## 問題36

信忠は一族をまとめきれず、若くして家督を譲り、隠退します。歴応2年(1339)に新田一族の正阿が創建し、嘉吉元年(1441)には世良田有親・親氏(松平初代)父子が滞在したと伝わる、信忠が隠居所にした時宗の寺院はどこでしょうか？

- (1) 大浜 称名寺(碧南市)  
(2) 野寺 本証寺(安城市)  
(3) 松平 高月院(豊田市)  
(4) 矢作 誓願寺(岡崎市)

## 解説

大浜(碧南市)の称名寺は、松平初代親氏が逗留したと伝えられ、その父祖などの菩提を弔う寺として、松平宗家にとっては大変重要な時宗の寺院です。信忠が先祖を大切に、先祖のかかわりのある桑子の妙源寺(岡崎市大和町)や岩津の妙心寺などに田地や山林などを寄進している史料も残されています。現在の称名寺には「徳川廟」が整備され、世良田有親・親氏父子をはじめ、親氏の祖父にあたる親季の墓もあります。



称名寺(碧南市)

**問題37**

信忠の時代に仕えた家臣で、代々、一向宗門徒であり、清長、正成、家長など弓の名手（はいしゆつ）を輩出し、後の「三河一向一揆」では一族が二分して戦った一族は何氏でしょうか？

- (1) 高木氏                      (2) 内藤氏  
(3) 服部氏                      (4) 渡辺氏

**解説**

先祖は源頼朝の御家人と伝えられ、応仁年間のころ三河に移り住んだと伝えられています。幸田町芦谷内藤家の史料によれば、内藤重清のとき、明応3年(1494)に安城松平家に仕えたとありますが、重清が岩津城を攻めたという所伝もあり、永正の乱以降、信忠の時代に重清の子 義清が安城松平家に仕えたのではないかと考えられます(諸説があり明確ではありません)。安城の姫小川に居館を構えていましたが、義清のときに上野城(豊田市上郷町)を預けられました。代々家康公に仕え、家長は鳥居元忠と共に伏見城の城将として最期を遂げています。



内藤家長と夫人  
(内藤記念館／宮崎県延岡市)

解答… (2)

**問題38**

松平七代 清康が岡崎に進出した際、山中城の攻略で一番の手柄（てがら）を立てた恩賞に市場の「枅取（商売の税の徴収）」の権利を求め、税を免除し、新たな城下町の発展を図った三河武士は誰でしょうか？

- (1) 大久保忠茂                      (2) 酒井忠尚  
(3) 林藤助忠満                      (4) 本多忠豊

**解説**

大久保一族は、もともとは宇都宮氏として上和田郷に来往しました。南朝側の武士であったということもあり、姓を宇津(宇都)と変えています。その後、早くから松平家に仕えますが、その事績がはっきりと残されたのが宇津忠茂の時です。忠茂は七代 清康に仕え、安城から岡崎進出の際の功労者となりました。その恩賞で岡崎の市の枅取の権利を与えられたのです。このことが岡崎の町づくりの初めであると考えられ、「岡崎開市」の歴史に名を刻んだのです。忠茂は姓を大久保と改め、以後、大久保一族として家康公の天下平定事業に大きな功績を残します。



大久保家の菩提寺 長福寺(岡崎市)

解答… (1)

## 問題39

享禄3年(1530)元旦に清康は「是」の字を左手に握る夢を見て、天下人になる吉夢であるという模外和尚の予言を喜び、模外を城下に招き「是字寺龍海院」を建立しましたが、松平家の菩提寺を変えることはできないため、家臣に寺を任せました。清康にその「檀主」(檀家の代表)を命じられた家臣は誰でしょうか？ 龍海院は、その家臣の家の移封とともに川越、厩橋(前橋)に移りましたが、その後は檀主が姫路に移っても前橋に留まり、今も前橋市内に一族の墓とともに存在しています。

- (1) 阿部定吉 (2) 石川清兼  
(3) 酒井正親 (4) 鳥居忠吉

## 解説

酒井正親は、家康公生誕の際に「抱衣刀」を大切に抱く重臣として「東照社縁起絵巻」にも登場する重臣です。若くして七代 清康に仕え、以後、常に松平当主の側近として仕えました。家康公が岡崎城主として自立した後には、西三河の平定戦で功を挙げ、西尾城主となりました。家臣としては最初の城持ち衆となったのです。



龍海院(岡崎市明大寺町)

## 問題40

清康の東三河進出に伴い、「山家三方衆」と呼ばれる奥三河の国人衆が服属します。次のなかで、「山家三方衆」に該当しないのは何氏でしょうか？

- (1) 田原の戸田氏 (2) 田峯の菅沼氏  
(3) 作手の奥平氏 (4) 長篠の菅沼氏

## 解説

国人衆とは、もともと在地生え抜きの武士たちを表す言葉です。これは中央政権から派遣される守護大名や地頭などに対して使われる概念であり、土豪などと表現される場合もあります。東三河には奥平氏や菅沼氏、牧野氏、戸田氏、西郷氏などの国人衆が存在しましたが、特に作手の奥平氏、長篠・田峯の菅沼氏など、奥三河の山間部の国人領主たちを「山家三方衆」と呼んでいました。守護大名や新興勢力に対し、独立した存在として絶えず恭順・離反を繰り返していたのです。



田峯城(北設楽郡設楽町)

**問題41**

天文4年(1535)、「おおだんな大檀那 世良田次郎三郎清康安城四代岡崎殿」と中心となる柱めいしるに銘を記し、清康が家臣たちと共に大樹寺の境内けいだいこんりゆうに建立した建造物は何でしょうか？

- (1) 五重塔 (2) 三門  
(3) 鐘楼 (4) 多宝塔

**解説**

多宝塔は清康が建立した現存建築物で、大樹寺では最も古く国の重要文化財に指定されています。大日如来の象徴としての宝塔を二重に重ねたもので、日本独自の形式です。天文4年(1535)、三河全域をほぼ統一した清康は、いよいよ尾張への進出を図りました。出陣に先立ち「逆修供養」(生前供養)も兼ねて、家臣たちと多宝塔を建立したのです。多宝塔には多宝如来を安置し、心柱に「大檀那世良田次郎三郎清康安城四代岡崎殿」と記して、自分こそが安城松平家の四代目、岡崎城主であると高らかに宣言したのです。



大樹寺多宝塔(岡崎市鴨田町)

**問題42**

天文4年(1535)、尾張の森山(守山)まで出陣していた清康は、ここで家臣の阿部正豊ただあだうに殺害されてしまいます。そのとき、その場で直ちに仇を討つたとされる家臣は誰でしょうか？

- (1) 植村氏明うえむらうじあき (2) 内藤義清よしきよ  
(3) 本多忠高ただたか (4) 米津常春よねきつねはる

**解説**

植村新六郎という通称で有名な三河武士です。氏明の石碑が岡崎市東本郷地内に建っています。植村氏は出自が美濃国土岐氏の一族と伝えられています。安城松平家に仕えたと考えられますが、活躍した人物としては、松平清康、松平広忠の二代にわたって近侍し、それぞれの主君の殺害現場に二度も居合わせて直ちに仇を討つたと伝わる氏明がいます。氏明は天文21年(1552)に今川方として織田氏と戦い戦死しました。氏明の子で、家康公に仕えた家存いえいは、清洲同盟の際に信長から褒められたことで有名です。



守山城址(名古屋市)

**問題43**

清康が亡くなり、六代 信忠の弟である桜井松平家の信定が岡崎城を支配下におきます。このとき、清康の嫡子で10歳の少年であった広忠を伴い、岡崎城を脱出して伊勢や駿河などを流浪したと伝わる家臣は誰でしょうか？

- (1) 阿部定吉 (2) 大久保忠俊  
(3) 酒井忠次 (4) 鳥居忠吉

**解説**

阿部定吉は、清康を殺害した阿部正豊の父親です。清康から大変信頼された重臣でもありました。自分の子が、誤解から清康を殺害してしまったことに強い責任を感じていたのでしょう。岡崎城に戻ると清康の嫡子 千松丸(広忠)の後見をします。岡崎城に強引に入城した桜井松平信定が千松丸の命を狙っていると察した定吉は、千松丸を伴って城を出奔、伊勢国神戸(鈴鹿市)や遠江、駿河国を流浪しながら岡崎城の仲間とも連絡を取り合い、千松丸の帰還を実現させました。



阿部一族の墓(願照寺/岡崎市軸越町)

**問題44**

広忠が岡崎城に戻るにあたり、流浪する広忠一行を援助し、三河 牟呂城(西尾市)まで戻れるよう支援した大名は誰だったでしょうか？

- (1) 今川義元 (2) 織田信秀  
(3) 斎藤道三 (4) 北条氏康

**解説**

駿河の今川義元と尾張の織田信秀は、七代 清康死後の西三河支配を争いました。岡崎城に入っていたのは、尾張の織田信秀と縁戚関係を持つ桜井松平信定です。このままでは、岡崎城を中心とした西三河の支配権を織田氏に奪われかねませんでした。広忠を伴っていた阿部定吉は、そのところを今川義元に進言したのでしょう。義元は広忠を全面的にバックアップしたのです。後に広忠はこの恩を忘れることなく、人質としての竹千代(家康公)を織田氏に略取されたときも、織田氏の側につくことはありませんでした。



牟呂城跡(西尾市)

## 問題45

天文6年(1537)、岡崎城に戻ることでできた広忠は、岡崎帰還に貢献した5人の家臣に加増の約束をしています。この5人のうちの4人は、八国甚六郎、成瀬又太郎、大原左近右衛門、林 藤助ですが、もうひとり、中心的な役割を果たした家臣は誰だったのでしょうか？

- (1) 天野貞有 (2) 石川忠輔  
(3) 大久保忠俊 (4) 酒井忠尚

## 解説

岡崎五人衆と呼ばれていますが、この「五人衆」という言葉は様々な場面で使われていて、同じ人物を表しているわけではありません。広忠帰還の際に尽力をした五人衆は、問題文にある四人と大久保忠俊です。忠俊は岡崎城を奪い取った桜井松平信定から不穏な動きを疑われ、伊賀八幡宮に七枚もの証文をしたためさせられました。その際も、「天罰も甘んじて受けよう」とすべてを破り捨てたと伝えられます。広忠はこの五人に感状と若干の土地を与えたのです。



松平広忠感状(安城市歴史博物館)

## 問題46

天文10年(1541)、広忠は刈谷城主 水野忠政の娘と結婚しました。家康公の母となるこの女性の名は何でしょうか？

- (1) 於大 (2) 帰蝶  
(3) 寧々 (4) まつ

## 解説

広忠と於大の結婚は、刈谷の水野氏との間の苦し紛れの政略結婚だと言われています。水野氏は織田氏から圧迫を受け、松平氏と結ぶことによって対抗しようと考え、松平氏も同様の利害関係があったからだということになっています。しかし、室町時代中葉に勢力を拡大した水野氏は、安城に拠点に移した松平氏と頻りに通婚していたとされ、西三河の支配権を保つ上で、ずっと以前から互いに必要な関係にあったと考えても良いでしょう。清康は忠政の正室をもらい受けています(源応尼)。また広忠も水野家の於大と結婚することで、西三河の安泰を図ろうと考えたのです。



於大の方(楞嚴寺/刈谷市)

## 問題47

天文11年(1542)12月26日、広忠に嫡男<sup>ちやくなん</sup>が誕生し、竹千代<sup>たけちよ</sup>(後の家康公)と名付けられます。竹千代はどこで誕生したのでしょうか？

- (1) 岡崎城 (2) 刈谷城  
(3) 大樹寺 (4) 六所神社

## 解説

「岡崎領主古記」によれば、「岡崎城二の曲輪坂谷透門の下」にある「古くから女官たちの住む屋敷」で誕生したと記されます。坂谷透門というのは、現在の岡崎城内に残される「坂谷門」跡ではなく、二の丸能楽堂(現在)の南側にあった「二の丸透門」のことでしょう。現在の「東照公産湯の井戸」あたりに女官たちの住む「坂谷屋敷」があり、そこで誕生したということになります。応仁元年(1467)より始まった150年におよぶ戦国時代のちょうど真中の年、天文11年(1542)12月26日寅の刻(午前4時ころ)に、岡崎城で天下人が生誕したのです。



東照公産湯の井戸(岡崎城/岡崎市康生町)

解答… (1)

## 問題48

家康公の誕生の際に、鳳来寺(新城市)の十二神将のひとりで家康公の生まれ年の十二支<sup>し</sup>を司る像<sup>しんじょう</sup>が忽然と消え、家康公が亡くなった後に元の場所に戻っていたと語り継がれている像は、次のどれでしょうか？

- (1) 因達羅大将(地蔵菩薩 巳)像  
(2) 宮毘羅大将(弥勒菩薩 亥)像  
(3) 真達羅大将(普賢菩薩 寅)像  
(4) 伐折羅大将(勢至菩薩 戌)像

## 解説

「鳳来寺縁起」には、薬師堂本尊の薬師如来を守護する十二神将のうち、寅年の守護神「真達羅大将」が忽然と姿を消したと記されています。解答にある「普賢菩薩」というのは、この守護神の本来の仏(本地仏)の名前です。このような考え方を神仏習合と呼んでいます。寅年に生まれてきた子(家康公)が真達羅大将の生まれ変わりであるという意味です。あり得ない寓話<sup>ぐわ</sup>と決めつけるのではなく、そのような強い願いが戦国の世にあったという世情を汲み取るべきでしょう。



真達羅大将  
(鳳来寺/新城市)

解答… (3)

**問題49**

天文13年(1544)、水野家の娘を離縁した広忠は、翌年、再婚し真喜姫を迎えました。継室となった真喜姫は誰の娘でしょうか？

- (1) 今川義元 (2) 戸田康光  
(3) 牧野成定 (4) 松平信定

**解説**

真喜姫は田原の戸田康光の娘です。松平氏と戸田氏は昔から縁戚関係を結んでいたこともあり、広忠も抵抗なく迎え入れたと考えられます。真喜姫との間には娘 市場姫が生まれています。しかし、父の戸田康光が、人質として駿府に送る竹千代を尾張国に送ってしまう事件が起きると、松平家中からは冷遇されたことと思われます。後に家康公が岡崎城主に復帰した時には、継母を憐れんで大切に扱ったとも伝えられていますが真相は定かではありません。龍海院に墓があるのは、重臣の酒井正親が面倒を見ていたのではないかと考えられます。



真喜姫の墓(龍海院／岡崎市明大寺町)

**問題50**

広忠に離縁された家康公の母は、3年後の天文16年(1547)に尾張国 知多郡の阿久比(坂部)城主と再婚します。後に上ノ郷(蒲郡市)の城主となった再婚相手とは誰でしょうか？

- (1) 織田信包 (2) 佐久間信盛  
(3) 佐々成政 (4) 久松俊勝

**解説**

於大の方が再縁した先は阿久比城主の久松俊勝です。久松家は織田家の家臣というわけではなく、独立した国人領主だったようです。後に、信長の計らいで家康公の与力として岡崎に住します。俊勝と於大の間には幾人かの子供がいましたが、三人の男子は後に家康公の異父兄弟として松平姓(久松松平氏)を許されます。俊勝は西郡の鞆殿氏を攻めた際の功績で上ノ郷城主となりました。菩提寺を付近の安楽寺に定め、墓も建立されています。久松松平家は伊予松山藩主として明治を迎えます。



坂部城址(知多郡阿久比町)

## 問題51

家康公が幼い頃、読み書きを習ったという岡崎市の寺で、松平初代親氏が伽藍を建立したと伝わり、境内の一角には、三方ヶ原の戦いの戦死者を弔う「三方原忠死者墳墓」や「東照宮」があるのはどの寺院でしょうか？

- |                                 |                                 |
|---------------------------------|---------------------------------|
| (1) 隨念寺<br><small>ずいねんじ</small> | (2) 瀧山寺<br><small>たきさんじ</small> |
| (3) 天恩寺<br><small>てんおんじ</small> | (4) 法蔵寺<br><small>ほうぞうじ</small> |

## 解説

法蔵寺はもともと天台宗の寺院でしたが、松平親氏・泰親が菩提寺と定めたころには浄土宗に改宗しています。浄土宗西山深草派の「檀林」(僧たちの学校)と定められ、多くの層が学んでいました。このような環境の下で幼い竹千代も勉強に励んだのでしょう。手習いの品々が残されています。ただし、8歳のころからは駿府の人質であり、知源院で学んだとも伝えられており、手習いの品々もその時のものではないかという説もあります。岡崎領の東にあり、三方ヶ原合戦の戦没者の霊もここで弔われたのでしょう。



法蔵寺東照宮(岡崎市本宿町)

解答… (4)

## 問題52

天文16年(1547)、広忠は6歳の竹千代を人質として今川家に送る途中、田原城主により尾張の織田信秀の許に送られてしまいました。広忠を裏切った田原城主は誰だったのでしょうか？

- |                                       |                                     |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| (1) 朝比奈泰朝<br><small>あさひな やすとも</small> | (2) 菅沼定盈<br><small>すがぬま だみつ</small> |
| (3) 戸田康光                              | (4) 牧野成定                            |

## 解説

松平氏は、田原の戸田氏とは古くから縁戚関係を持つなど、どちらかというとも友好関係にありました。戸田康光も、最初の名は宗光であったのを、松平清康の偏諱を受けて康光と改めたのです。ところが清康が守山で殺害されると、松平一族は内紛を起し、織田方に従う一門衆も多く出てしまいました。康光は今川氏に従っていましたが、西三河の状況が反今川に傾くと、自分も渥美半島の支配権を守るためにそれに従おうと考えたのでしょう。娘の真喜姫を嫁がせてはいましたが、岡崎城の広忠に叛き、竹千代を略取したと考えられます。駿府の義元は激怒し、田原城を攻めて康光一族は殺されてしまいました。田原戸田氏は滅んでしまったのです。



戸田一族の菩提寺 長興寺(田原市)

解答… (3)

**問題53**

天文18年(1549)、広忠は離反した叔父の信孝を耳取とりなわての戦いで破り、松平党を統一します。しかし、その年の春、織田方の間者 岩松八弥いわまつはちやに斬られ24歳で死去してしまいます。父 広忠の菩提ぼだいを弔うため、後に家康公が墓所の近くに創建した寺院は何でしょうか？

- (1) 松應寺しょうおうじ (2) 隨念寺ずいねんじ  
 (3) 瀧山寺たきさんじ (4) 満性寺まんしょうじ

**解説**

広忠の死については、病死を記す史料も見られ、真実については定かではありません。ただ、24歳という若さであったことや、松平一族の内紛を収めたばかりであったことなどから、その死を明らかにすることを控えたとも考えられます。遺体は「能見ヶ原の み だ びで荼毘に付された」と伝えられます。その場所に菩提を弔うために家康公によって建立されたのが松應寺です。家康公の計らいで正一位の官位を与えられたことからか、仏式の墓ではなく松が植えられ、廟の入り口には鳥居が建てられています。後には天皇の祈願寺ともなりました。



松應寺広忠廟(岡崎市松本町)

**問題54**

天文18年(1549)、広忠の死を知った今川義元は、織田軍の三河侵攻しんこうを防ぐため、織田信秀の長男信広が守る安城城を攻め、信広を生け捕りにし、人質交換で竹千代を取り戻すと、改めて駿府すんぶの今川家に人質として竹千代を送りました。この安城合戦で今川軍を率いたのは誰だったのでしょうか？

- (1) 井伊直盛い い なおもり (2) 鵜殿長照う どのながてる  
 (3) 岡部元信おか べ もとのぶ (4) 太原雪斎たいげんせっさい

**解説**

広忠の死後、今川義元は岡崎を支配下に置き、織田氏との争いの最前線にしました。その時の総司令官が義元の学問の師であり軍師でもある太原雪斎です。前年に二度目の小豆坂合戦があり、織田信秀長男(庶子)の信広が安城城代になっていました。雪斎は信広を生け捕りにして、尾張に囚われている竹千代との交換をしようと考えたのです。作戦は岡崎衆の活躍もあって成功し、人質交換に成功したのです。



太原雪斎木像(臨濟寺/静岡市)

**問題55**

今川氏の支配下において、<sup>あるじ</sup>主のいない岡崎城で長老として家臣団<sup>ほうかい</sup>を崩壊させずに保ち続け、駿府に身柄<sup>みがら</sup>を預けられている竹千代には3歳年長の我が子をお供させた三河武士は次の誰でしょうか？

- (1) 石川清兼<sup>いしかわきよかね</sup>                      (2) 大久保忠員<sup>ただかづ</sup>  
(3) 酒井正親<sup>さかいまさちか</sup>                      (4) 鳥居忠吉<sup>たによし</sup>

**解説**

主のいない岡崎城には今川氏の家臣が城代として駐留していましたが、岡崎衆には年貢の上納などが厳しく課され、なおかつ織田氏との戦になれば最前線で危険な戦いを強いられるといった有様でした。「若君が帰るまでは」と、岡崎衆に忍耐を促し、気持ちをまとめていた長老が鳥居忠吉だったと伝えられています。忠吉は家康公が元服し一時帰参を許されたとき、渡(岡崎市渡町)にある自分の蔵に案内して、貯めてきた銭や米、武具などを見せ、家康公を感動させたと伝えられています。



渡城址(岡崎市渡町)

解答… (4)

**問題56**

次の譜代家臣のなかで、家康公の駿府への人質に<sup>たいどう</sup>帯同しなかったのは誰でしょうか？

- (1) 石川数正<sup>かずまさ</sup>                                      (2) 酒井忠次  
(3) 平岩親吉<sup>ひらいわちかよし</sup>                                      (4) 本多忠勝

**解説**

人質としての家康公に帯同した家臣は、およそ30名あまりであったと記されます。その中で最も年長であったのが石川数正でした。今川家との様々な交渉事を行っていたと考えられます。酒井忠次は岡崎奉行衆の一人として、留守を守っていた様子がいくつかの史料に散見されます。菅生郷<sup>まんしょうじ</sup>満性寺における「大工跡職の儀」については、駿府の元信(家康公)の沙汰を、忠次を含めた五人の奉行の連名で発行しています。また今川義元からの信頼も厚く、大樹寺塔頭建立に際しての管理<sup>ゆだ</sup>を委ねられていました。



酒井忠次生誕地(井田城址/岡崎市井田町)

解答… (2)

## 問題57

竹千代の母は、他家に再び嫁ぎながらも駿府にいる我が子を思い、自分の母に竹千代の養育を託します。駿府に行き、孫の竹千代を養育した祖母の源応尼の法名は何でしょうか？

- (1) 華陽院 (2) 高台院  
(3) 崇源院 (4) 伝通院

## 解説

於大の方の実母であり、家康公の祖母にあたる源応尼については、史料に乏しく明確なことがわかっていません。ただ、大河内家の娘であったことや、水野忠政の正室であったこと、松平清康の第二夫人となっていたことなどは確かでしょう。清康の死後は岡崎城を出て、幾人かに再縁しています。岡崎に残って竹千代を養育したというのは創作の世界です。駿府での人質時代は、今川義元に要請されて竹千代の養育にあたりました。後世、家康公が天下人になったとき、源応尼のために手習いをした知源院を再建し、寺名を源応尼法名の華陽院としたのです。



華陽院墓(華陽院／静岡市)

解答… (1)

## 問題58

弘治元年(1555)、14歳になった竹千代は今川義元自らが烏帽子親となり元服。義元から「元」の一字を賜り、名を改めました。竹千代の名乗った名前は何でしょうか？

- (1) 信元 (2) 元忠  
(3) 元親 (4) 元信

## 解説

駿府での竹千代は幼いころから武将としての才覚を見せていたのでしょう。義元は今川家の重臣として竹千代の将来を考え、元服の前年には「腹巻」(具足)をプレゼントして、松平当主として認めたりしていました。元服の際には自らが烏帽子親になり、手厚く儀式を執り行っています。名は「元信」と改めましたが、元の字は義元の偏諱を授けられました。「信」については、「信長」の偏諱であるとする意見もありますが、これは間違いでしょう。官途名が「蔵人」(私称)になっているところから、同様の官途名を用いていた六代 信忠の偏諱ではないかと考えられます。

竹千代腹巻  
(静岡浅間神社／静岡市)

解答… (4)

## 問題59

弘治3年(1557)、16歳の家康公は今川義元の妹(あるいは養妹)の娘、後の築山殿と結婚しますが、この妻(築山殿)の父は誰でしょうか？

- (1) 今川義元の弟 今川氏豊
- (2) 今川家重臣の庵原元政
- (3) 今川一門の関口義広(親永)
- (4) 今川一門の瀬名氏俊

## 解説

義元が竹千代の将来を今川家の重臣として考えていた様子が、その結婚相手からも読み取れます。家康公の正室となった築山殿(この名は後世につけられた通称名)は、今川一門であり、義元の重臣である関口義広の娘でした。関口氏は駿河の瀬名郷に知行地を持つ瀬名今川一族で、義元の親族でもあります。義広の妻はもともと井伊氏の娘であり、義元の養妹となっていました。義広に嫁いだとされています。したがって家康公は義元の姪と結婚したことになるのです。



築山殿(西来院/浜松市)

解答… (3)

## 問題60

永禄元年(1558)、家康公は初陣にあたり、祖父清康の武名にあやかり元康と改名、織田方の鈴木氏の城を攻めます。家康公の軍議での指示振りやその采配に譜代の家臣たちは「清康公の再来」と感嘆し、家臣一同、その立派な成長ぶりに涙を流して喜んだと徳川実紀に伝わります。さて、家康公が初陣で攻略した城はどこでしょうか？

- (1) 尾張 清州城(清須市)
- (2) 尾張 小牧山城(小牧市)
- (3) 三河 田原城(田原市)
- (4) 三河 寺部城(豊田市)

## 解説

今川義元は17歳になった家康公に、加茂郡寺部城の鈴木重時を攻撃するよう命じました。これが家康公の初陣です。領主クラスの子の初陣というのは一般的には儀式的なもので、安全が第一だったのですが、家康公は最初から生死をかけた戦いに挑んだのです。自ら馬に乗り、岡崎衆の先頭に立って戦いました。家康公を「馬上の大将」と称するようになった所以です。



寺部城址(豊田市)

解答… (4)

## 問題61

永禄2年(1559)、18歳の家康公に長男 竹千代(後の信康)が誕生しました。信康は8年後の永禄10年(1567)に結婚しますが、同じ9歳で信康の妻となった徳姫は誰の娘でしょうか？

- (1) 今川氏真 (2) 織田信長  
(3) 柴田勝家 (4) 武田勝頼

## 解説

後述しますが、家康公は織田信長と同盟を結びます。その証として幼い二人の子の結婚が成立したのです。本人たちはまだ遊びたい盛りの子どもですから、当然大人の感情はなかったのではと思いますが、仲良くもし、けんかもしたことでしょう。このような関係が、将来大きな事件(信康事件)を引き起こすことにつながってしまったのではと考えられます。家康公が晩年に息子 秀忠の妻の江姫に送った手紙の中で、信康について、「自由気ままに育ててしまっただが、それがもとで親の言うことを聞かなくなった」と述懐しています。信康と徳姫の関係性を暗示しているようです。



岡崎三郎信康(勝蓮寺/岡崎市矢作町)

## 問題62

永禄3年(1560)、長女 亀姫が誕生。将来、亀姫の夫になる人物で、長篠の合戦で長篠城を守り抜いた三河武士は誰でしょうか？

- (1) 大久保忠隣 (2) 奥平信昌  
(3) 菅沼定仍 (4) 鳥居強右衛門

## 解説

亀姫は、桶狭間の合戦の直前に駿府で生まれました。その後、14歳のとき、家康公が奥平氏の帰順を試みた際、織田信長の提案で亀姫と新城城主 奥平信昌の婚約を条件の一つとして示したのです。天正3年(1575)に起きた長篠の戦いの戦功で、翌年、信昌のもとへ嫁ぎました。亀姫は4人の男子(家昌・家治・忠政・忠明)と1女(大久保忠常室)をもうけます。後に信昌が関ヶ原の戦いでの戦功により、美濃加納10万石に封じられると、亀姫は三男 忠政共々、加納に移り、以後は「加納御前」と呼ばれるようになりました。気丈な女性で、信昌には一人の側室も持たせなかったと伝えられます。

奥平信昌  
(建仁寺塔頭 久昌院/京都市)

## 問題63

永禄3年(1560)、今川義元が尾張に侵攻した「桶狭間の戦い」で、先陣の家康公が兵糧入れを命じられた今川方の大高城の城主は誰だったでしょうか？

- (1) 井伊直盛 (2) 鵜殿長照  
(3) 柴田勝家 (4) 水野信元

## 解説

桶狭間の合戦については、今川義元の上京説はあまり聞かれなくなりました。注目すべきは、尾張国に構えた今川方の二つの城(鳴海城、大高城)が、織田方の砦に囲まれる戦況に陥っていたという事実です。いずれも海沿いの重要拠点でしたので、義元は鳴海には岡部元信、大高には鵜殿長照と頼れる重臣を配していました。信長は二つの城の周囲にいくつもの砦を築き、物資の補給路を遮断したのです。大高城の鵜殿長照は義元に救援を要請し、その兵糧入れの大役を命じられたのが家康公だったのです。



金陀美具足  
(久能山東照宮／静岡市)

解答… (2)

## 問題64

桶狭間で大将の義元が打ち取られ、家康公は岡崎の大樹寺に退却。先祖の墓前で自害を決意した家康公でしたが、登誉上人に諭され、平和な社会建設への志を立てます。家康公が授けられ、以後、旗印に掲げた言葉とは何だったでしょうか？

- (1) 厭離穢土 欣求浄土  
(2) 進者往生極楽 退者無間地獄  
(3) 天下和順 日月清明  
(4) 非理法権天

## 解説

「厭離穢土 欣求浄土」の言葉は、源信による「往生要集」の第1巻、2巻の表題です。「厭離穢土」の巻では様々な地獄の世界が、「欣求浄土」の巻では地獄の苦しみから救ってくださる仏の世界が描かれています。家康公は「極楽浄土の世界を創る」ことを自分の志とし、そのために戦うことを決意したのでした。(2)は一向一揆の際に門徒宗が掲げた言葉、(3)は松平初代親氏の願文にある言葉、(4)は楠木正成の旗印に記された言葉です。



登誉上人  
(大樹寺／岡崎市鴨田町)

解答… (1)

**問題65**

岡崎城に入り、自立を目指す家康公は、永禄4年(1561)、今川方の西尾城を攻略。家老として清康、広忠、家康の三代に仕え、西尾城攻めに功のあった譜代家臣に西尾城を与えました。家康公の下で初の城持ち(城主)となった三河武士は誰だったでしょうか？

- (1) 石川清兼 (2) 大久保忠俊  
(3) 酒井忠次 (4) 酒井正親

**解説**

徳川家の創業期に仕えた酒井氏は、忠次の「左衛門尉家」と正親の「雅楽頭家」の二つの系統がありました。先祖は酒井広親で松平初代親氏の子とも、甥とも伝えられます。正親は清康の代から重臣として仕え、家康公の生誕時には「朧衣刀」を抱く役目を果たしていました。家康公が駿府に人質として囚われているときには、岡崎五奉行の筆頭として留守を守っています。家康公の信頼も厚く、家臣としては最初の城持ちとして西尾城を与えられたのです。



朧衣刀を抱く酒井正親(東照社縁起絵巻巻一)

解答… (4)

**問題66**

永禄5年(1562)、家康公は織田信長と軍事同盟(清州同盟)を結びます。このとき、家康公に従い清州城に赴いた際の振る舞いを信長より褒められ、太刀を賜ったと伝わる三河武士は誰でしょうか？

- (1) 石川数正 (2) 植村家存  
(3) 酒井忠次 (4) 蜂屋貞次

**解説**

植村家存は9歳から家康公に側近として仕え、信長との清州同盟締結の際には、ともに清州城まで赴きました。家康公の刀持ちとして、大刀を持ったまま謁見の書院に入ろうとしたのを信長の家臣に咎められると、「主の身を守るのが我らの役目」と逆に睨み返したと言います。その様子を見ていた信長は感心し、前漢の樊噲(劉邦に仕えた武将)に似ていると賞賛しました。会見後、信長は家存に二振りの「行光の太刀」を与えたと伝わります。家存は後には家康公の旗本先手役となり、若くして一隊の将となりました。



植村氏明生誕地碑(岡崎市東本郷町)

解答… (2)

## 問題67

永禄6年(1563)、元康から家康に改名した年に「三河一向一揆」が勃発します。この一揆が起こった理由とされるのはどれでしょうか？

- (1) 三河を加賀国のように一向宗徒による自治国にしたかったため
- (2) 家康公と対立する国人領主などに家康政権を倒すよう扇動されたため
- (3) 家康側が無法者を寺内で捕縛するなど守護不入の特権を侵害したため
- (4) 家康側が松平家が帰依する浄土宗以外の寺院に改宗を迫ったため

## 解説

三河一向一揆は松平家譜代の家臣団が二分するなど、家康公にとって大変な危機となりました。この一揆は宗教的な対立というよりも、一揆側の真宗寺院に許されていた「不入権」特権を侵したことが原因と考えられます。特に家康公の家臣が佐々木上宮寺に押し入り、境内の粃米を強引に持ち去ったことが発端となりました。一向一揆はこの地域の領主権を巡る権力争いだったと考えてもよいでしょう。



上宮寺本堂(岡崎市上佐々木町)

## 問題68

一揆側の拠点(三河三ヶ寺)のひとつである佐々木上宮寺に対し、すぐ北に立地する桑子妙源寺は家康側の拠点となりました。この妙源寺を創建した桑子城主の一族で、後に家康公の側近となり、紀伊徳川家の付家老(田辺城主)になった三河武士は誰でしょうか？

- (1) 安藤直次
- (2) 中山信吉
- (3) 成瀬正成
- (4) 水野重央

## 解説

三河国桑子の在地領主であった安藤信平が、鎌倉中期に親鸞の説法に感化されて創建したのが妙源寺であると伝わります。その安藤氏一族の子孫と考えられる直次は、弘治元年(1555)に生誕、幼少期から家康公に仕え、姉川の戦いや長篠の戦いにも参戦しました。江戸開幕後は、本多正純や成瀬正成と共に家康公の側近として活躍します。駿府での大御所時代にも同様に政策ブレーンとして参画し、家康公の十男頼宣の紀州藩付家老となって紀伊田辺城主となりました。



妙源寺柳堂(岡崎市大和町)

## 問題69

一揆側の拠点のひとつである針崎勝鬘寺と岡崎城の中間地にあり、最激戦地となった上和田砦を一族を挙げて守り抜き、後に一揆衆との和睦の仲介も行ったのは何氏でしょうか？

- (1) 大久保氏                      (2) 酒井氏  
(3) 鳥居氏                        (4) 本多氏

## 解説

大久保一族は代々法華宗の宗門であり、一向一揆を起こした浄土真宗本願寺派(一向宗)の門徒武士はいませんでした。そのため一族を挙げて家康公に従い、特に付近の針崎勝鬘寺門徒と激しく争いました。上和田城には大久保一族が集結、岡崎城に押し寄せようとする一向宗門徒と激戦となり、家康公自身も駆け付けたという記録が残されています。針崎勝鬘寺門徒のリーダーに、大久保家と縁戚関係にある蜂屋貞次がいました。後に貞次から和睦の相談を持ちかけられた大久保家長老の忠俊は、浄珠院での和睦交渉の仲介をします。一揆側の武士たちを赦免するように家康公に説得した話は有名です。



上和田城跡  
(大久保一族発蹟地／岡崎市上和田町)

## 問題70

一揆側に付いた家臣の一部は、一揆の終結後、帰参を赦されました。その後「三方ヶ原の戦い」において、家康公の恩義に報いるべく、家康公の身代わりとなって戦死した三河武士は次の誰でしょうか？

- (1) 蜂屋貞次                      (2) 夏目吉信  
(3) 本多正信                      (4) 渡辺守綱

## 解説

家康公は大久保忠俊の進言に従い、多くの武士たちを赦免しました。許された武士たちは、その後は家康公のために忠義を尽くします。特筆すべき活躍をした武士に幸田六栗郷在住の譜代家臣 夏目吉信がいます。吉信は三方ヶ原の合戦時には浜松城の留守を守っていました。しかし家康公危機の報が入ると、数十名の家臣たちを引き連れ三方ヶ原に。戦場で死を覚悟した家康公を引き留め、自分の馬に乗せて城に引き返させると、自らは三河守家康を名乗り討ち死にを遂げたと伝えられています。浜松市には吉信の忠義を称える旌忠碑が建てられています。



夏目吉信旌忠碑(浜松市)

## 問題71

一揆では一向宗徒側の武将として家康公に敵対し、  
 収束後は諸国を流浪。大和国の松永久秀に「非常  
 の器である」と高く評価され、帰参を赦されると  
 家康公の側近の参謀として徳川政権確立や初期幕  
 政を主導した三河武士は誰でしょうか？

- (1) 蜂屋貞次 (2) 夏目吉信  
 (3) 本多正信 (4) 渡辺守綱

## 解説

家康公の晩年、その右腕として手腕を發揮したのが本多正信です。天文7年(1538)の生まれといえますから家康公よりも4歳年長ということとなります。はじめは鷹匠として家康公に仕えたようですが、その生い立ちについては詳らかではありません。しかし永禄6年(1563)に起きた三河一向一揆では、一揆方の武将として弟と共に家康公に敵対しました。一揆の終息後は、岡崎を出奔して大和国の松永久秀に仕えます。その後、久秀のもとを去って諸国を流浪しますが、大久保忠世の計らいで再び家康公に仕えるようになりました。



本多正信(加賀本多博物館/金沢市)

解答… (3)

## 問題72

槍が得意で「槍半蔵」と呼ばれ、一向一揆では父とともに一揆側に与しましたが終結後に赦され、後に家康公九男 義直の尾張藩付家老に任じられ、三河 寺部城主(豊田市)となった三河武士は誰でしょうか？

- (1) 蜂屋貞次 (2) 夏目吉信  
 (3) 本多正信 (4) 渡辺守綱

## 解説

渡辺守綱の先祖は、嵯峨源氏の嫡流 渡辺綱の流れを汲むと伝わります。系譜によれば足利将軍家に奉公衆として仕え、後に三河国浦部郷に移住してきました。渡辺守綱は通称を半蔵と称していました。家康公と同じ年に生まれ、若いころから出仕し、西三河の平定戦で大いに活躍をします。特に今川方の板倉重貞と争った豊川の八幡の戦いでは、追ってくる敵に対し、得意の槍で防戦したことから「槍半蔵」の異名で呼ばれました。服部正成の「鬼半蔵」と対比して呼ばれたものでしょう。後に尾張藩の付家老となり、寺部城主となったのです。



渡辺守綱(守綱寺/豊田市)

解答… (4)

## 問題73

三河一向一揆を平定した家康公は、永禄8年(1565)、東三河平定戦で今川方の最重要拠点の吉田城を攻略し、功のあった譜代家臣に吉田城を与えました。家康公の家臣としては西尾城に続き、二番目の「城持ち」となり、東三河を任された三河武士は誰でしょうか？

- (1) 石川数正                      (2) 酒井忠次  
(3) 鳥居元忠                      (4) 平岩親吉

## 解説

この時に家康公から酒井忠次に宛てた書状が残されていますが、「吉田東三河之儀申付候」—吉田と東三河の知行を任せるという内容が記されていました。家康公は三河一向一揆で分裂した家臣団を再編成し、東西三河の家臣団をそれぞれの旗頭のもとに統率しました。その内容を見ると、西三河の家臣団には矢作川流域の松平一族が多く、東三河の家臣団には松平一族に加えて国人衆と呼ばれる在地の領主層も含まれています。その旗頭となった忠次は、家康公に最も近いリーダーであったことが容易に想像できるのです。



酒井忠次宛家康判物  
(致道博物館／鶴岡市)

## 問題74

東三河平定戦で田原城を<sup>かんらく</sup>陥落させた恩賞に家康公から田原城を与えられ、後の関東移封で上野<sup>こうづけ</sup>白井城(群馬県渋川市)に移るまで田原城主を務めた三河武士は誰でしょうか？ 関ヶ原合戦後、嫡子<sup>ちやくし</sup>は初代岡崎藩主になります。

- (1) 石川家成                      (2) 本多忠勝  
(3) 奥平定能                      (4) 本多広孝

## 解説

本多家は大きく分類すると五つの家が存在します。本多忠勝の平八郎家、重次の作左衛門家、正信の弥八郎家、康俊の彦八郎家、康重の豊後守家の五つです。このうち、岡崎藩主となったのは、前半に本多康重の豊後守家、後半に忠勝子孫の平八郎家でした。この豊後守家では、康重の父である広孝が家康公に忠義を尽くし、信頼もされた武将でした。三河一向一揆の際には本多一族が二分する中、我が子の康重を人質に差し出し家康公に忠節を誓ったと伝えられます。このようなこともあり、家康公は岡崎藩初代藩主に康重を<sup>ぼってき</sup>抜擢したのでしょうか。



本多康重(忠恩寺／長野県飯山市)

## 問題75

永禄8年(1565)、三河領内の民政の充実を図るため、家康公は「三河三奉行」を置いたといわれています。性格が異なる三者三様の三人のなかで、公平、慎重でどちらにも偏らない判断をすることから、「どちへんなし」と評された三河武士は誰でしょうか？

- (1) 天野康景 (2) 大岡忠政  
(3) 高力清長 (4) 本多重次

## 解説

三河一向一揆が終結した翌年の永禄8年(1565)3月、家康公は天野康景、高力清長、本多重次の三人を三河の三奉行として、民政・訴訟等を担当させることにしました。「仏高力、鬼作左、どちへんなしの天野三兵」と評されましたが、これは、三人それぞれ性格が異なる者を奉行として抜擢し、個性に応じて適材適所に配置した家康公の人事面での優れた能力を評したものでもあります。この時には軍制の再編も行っており、民政面でも門閥や一門によるものではない、新しい政治の形を示した職制であると考えられます。



小牧長久手合戦図屏風の天野康景  
(犬山城白帝文庫/犬山市)

解答… (1)

## 問題76

幕末の北越戊辰戦争で焼かれ、米百俵の逸話を残した越後長岡藩。筆頭家老 稲垣平助は主戦派河井継之助と対立し、後に長岡藩再興をした人。上席家老 山本帯刀は、後に連合艦隊司令長官になる山本五十六に家を継がせました。藩主 牧野家、両家老(稲垣家、山本家)ともに出身地は三河です。さて、戦国期の三河平定戦、今川家に忠節を尽くし、最後まで家康公に抗戦した牧野氏の居城はどこだったのでしょうか？

- (1) 牛久保城(豊川市)  
(2) 設楽城(北設楽郡東栄町)  
(3) 二連木城(豊橋市)  
(4) 野田城(新城市)

## 解説

牧野家は牛久保(豊川市)に居城を構えていた国人衆です。もともと、松平家はもとより、今川家に対しても独立を保ちながら、家の存続を果たしてきました。先祖の牧野古白は吉田城を築城し、松平長忠に備えますが、永正三河の乱後には今川家に接収されることとなります。牧野家は独立心が旺盛であり、最後まで家康公の三河統一に抵抗したのです。



長岡藩初代藩主 牧野忠成 木像

解答… (1)

## 問題77

永禄9年(1566)、牧野成定<sup>なりさだ</sup>を降伏させ、家康公は三河統一を実現しました。家康公が東三河を平定していく過程において、今川方で抵抗した武士たちに対し、全般的にどのような処遇を行ったのでしょうか？

- (1) 城主一族は処刑し、重臣は追放して領地を没収<sup>しゅう</sup>するなど、二度と抵抗することがないよう厳しく処断した。
- (2) 人質を取り、譜代家臣の部下として厳格に従わせた。
- (3) 本領を安堵<sup>あんど</sup>したり、同等<sup>こくだか</sup>の石高<sup>いしがう</sup>の領地替え<sup>が</sup>を約束するなど、これまでの権益<sup>けんえき</sup>を認める寛大な処遇をした。
- (4) 今川家から受けていた以上の地位と領地を与え、譜代家臣より優遇した。

## 解説

武士たちの無秩序な土地の奪い合いが戦国時代<sup>あるじ</sup>。主に対する忠節も自分の土地を守るために示したものです。家康公のみならず、戦国大名たちは安堵状<sup>あんどじょう</sup>を発給したのです。



牛久保城址(豊川市)

解答… (3)

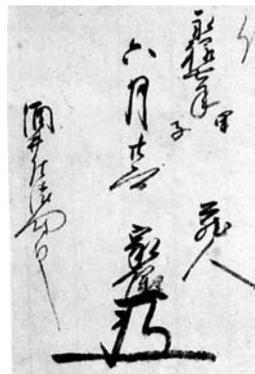
## 問題78

永禄9年(1566)、三河の統一を果たした家康公は、朝廷より“従五位下”の位階と、かつての今川義元と同じ官職が与えられ、併せて徳川復姓(改姓)が認められました。その官職(官途)は何だったのでしょうか？

- |                              |                                 |
|------------------------------|---------------------------------|
| (1) 藏人佐 <sup>くらんのすけ</sup>    | (2) 征夷大將軍 <sup>せいいたいしやうぐん</sup> |
| (3) 中務大輔 <sup>なかつかさい ふ</sup> | (4) 三河守 <sup>みかわのかみ</sup>       |

## 解説

「三河守」などの、国名が記される官職名は多くの武士たちが使用しています。例えば、石川伯耆守数正とか、本多豊後守広孝など、大名でもないのに使用している場合があります。自分で勝手に名乗ることもできたのです。そういう場合は「私称」ということになります。官職名は朝廷の様々な役職名ですから、正式には朝廷から授かるものですが、多くの武士たちはそのようになることを望んで称していたということでしょうか。先祖から受け継いでという場合もありました。家康公も正式に三河守を称する前は、「藏人佐」を称していました。

「藏人家康」の署名  
酒井忠次宛判物  
(致道博物館／鶴岡市)

解答… (4)

## 問題79

一般的に三河統一と言いますが、永禄9年(1566)時点では、三河国内に別の人物が統治していた地域が二ヶ所ありました。ひとつは織田領に組み込まれた加茂郡の矢作川以西(豊田市、みよし市を中心とした地域)ですが、もう一ヶ所はどこでしょうか？

- (1) 渥美郡南部(田原市)が今川領
- (2) 設楽郡の大部分(新城市、設楽町など)が武田領
- (3) 幡豆郡南部(西尾市の一部)が吉良領
- (4) 碧海郡の大部分(安城市、刈谷市、知立市、碧南市、高浜市)が水野領

## 解説

刈谷の水野氏、と表現することが多いですが、実際は碧海郡の大部分を支配地としていました。これは、岡崎の松平氏が、もっと広範な地域を治めていたと同様、居城がどこにあったのかを示す言い方です。織田信長は水野領が次第に広くなっていくことを警戒していました。その結果、佐久間信盛の讒言を聞き家康公に処断を命じたと考えられています。



刈谷城帯曲輪外堀(刈谷市)

## 問題80

三河一向一揆の後、家康公は「三備の制」と呼ばれる家臣団の軍制改革を行い、三河家臣団を東三河衆と西三河衆、そして家康公直轄の旗本の三つ備えに再編しました。次の中で、旗本先手役として活躍した三河武士は誰でしょうか？

- (1) 石川数正
- (2) 西郷正勝
- (3) 本多忠勝
- (4) 本多正信

## 解説

旗本とは、大将の本陣旗を守る武士たちを指して表現した言葉です。親衛隊や近衛兵のような存在と考えてよいでしょう。「先手役」は「さきてやく」と読みますが、「せんてやく」と呼んでも間違いではありません。家康公独自の軍制で、旗本を自身の護衛のみではなく、積極的に戦闘に投入することを目的とした親衛隊のような部隊でしたので、城下に常駐させたのです。代表的な武士が本多忠勝、榊原康政、鳥居元忠、大久保忠世、忠佐、植村家存などです。

本多忠勝像  
(岡崎公園/岡崎市康生町)

## 問題81

生涯57度の戦いで、かすり傷ひとつ負わなかったと伝えられ、武田には「家康に過ぎたるもの」、織田信長には「花も実も兼ね備えた武将」、豊臣秀吉には「日本第一、古今独歩の勇士」とその武者振りを称えられた三河武士は誰でしょうか？ 蜻蛉切の槍と鹿角の兜で知られ、子孫は三河 岡崎藩主として明治を迎えました。

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次  
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

## 解説

本多忠勝は武功の人、というイメージが強いですが、家康公の天下平定事業で、常に側近として大きな戦の一線で活躍をしてきたからです。ただ、もう一面、忠勝が評価されるのは、大多喜(千葉県)や桑名(三重県)における、機能的なまちづくりでしょう。特に桑名は「慶長の町割り」と呼ばれる、揖斐川の水を引き込んで商人町や武家町、寺町などを区割りしたランドデザインが優れており、現在でも生かされています。



桑名城外堀(慶長の町割り跡/桑名市)

## 問題82

後に日本一短い手紙と顕彰される「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の文を長篠の陣中から妻に書き送った三河武士は誰でしょうか？

- (1) 大久保忠世 (2) 酒井忠次  
(3) 榊原康政 (4) 本多重次

## 解説

本多重次ですね。「鬼作左」との異名を持つ、厳格で頑固な印象の武士ですが、それだけに家族を思う心情があふれる手紙として、重次の人柄をよく表しています。秀吉の実母 大政所の岡崎城での扱いに激怒した秀吉の命で、家康公は仕方なく重次を蟄居させますが、子の成重(お仙=仙千代)を越前松平秀康の付家老として越前国丸岡藩4万3千石、丸岡城主に抜擢しました。丸岡城は安土桃山時代に築城された、大変古い現存天守として有名ですが、丸岡の町では重次の手紙を町おこしに利用し「日本一短い手紙」の町としてアピールをしています。



丸岡城天守(福井県坂井市)

## 問題83

「鬼半蔵」の異名を持つ槍の遣い手で、「本能寺の変」の際、堺(大阪府)にいた家康公一行の“伊賀越え”の危機を救い、その後、伊賀衆を率いました。江戸城から甲州街道に通じる搦手門の警固をこの半蔵が担当したことから、門の名前が「半蔵門」になったとも伝わる三河武士は誰でしょうか？

- (1) 石川数正 (2) 蜂須賀正勝  
(3) 服部正成 (4) 本多正信

## 解説

服部氏については、伊賀国の在地領主であった服部半蔵保長が、はじめ室町幕府第十三代将軍 足利義輝に仕え、後に松平清康・広忠に仕えたと伝わります。以後、服部氏は代々松平氏(徳川氏)に仕えました。保長の子 正成は家康公に仕えますが、伊賀国の生まれではなく三河国の生まれです(地域は特定できていません)。伊賀越えの際には、旧領地の者たちが協力をしたのでしょうか、正成が忍者を引き連れて…という事実はなさそうです。正成は旗本として家康公の警護や情報伝達の任に就いており、江戸城半蔵門付近に屋敷を構えて将軍の警護にあたったのです。



半蔵門古写真(甲州街道/千代田区)

## 問題84

駿府人質時代から付き従い、関白 秀吉から官位を推挙された際、「それがし不才者に候えば、両君の恩恵を蒙って二主へ忠を尽くす道を知り申さず」と固辞し、関ヶ原前哨戦の会津攻めでは伏見城を預かって玉砕し、その忠節の生涯は「三河武士の鑑」と称えられる武将は誰でしょうか？

- (1) 榊原康政 (2) 鳥居元忠  
(3) 内藤家長 (4) 本多忠勝

## 解説

鳥居元忠の忠節心は、江戸時代の武士たちの良いお手本となりました。戦国の時代では、武士の本義は「家と土地を守ること」であったのですが、そのための争いが絶えなかったために、新しい武士の姿を「利を求めない、主君に忠義を尽くす、民に慈悲の心を持つ」姿に変えようとししました。そのために「正義を学ぶ学問」とも評される朱子学を学び、お手本となる武士の姿を三河譜代の武士に求めたのでしょうか。伏見城で玉砕をした元忠の姿は「三河武士の鑑」と称賛され、武士たちの鑑にもなったのです。

鳥居元忠  
(精忠神社/栃木県下都賀郡壬生町)

## 問題85

長男 信康の傅役を務めた家臣に跡継ぎがないことを心配した家康公は、八男 仙千代を養子に与え(6歳で没)、さらに九男 義直の傅役と甲斐統治を命じ、そして義直が尾張に転封すると付家老として付属させました。直臣扱いの犬山城主として尾張徳川藩の基礎固めに尽くしたこの三河武士は誰でしょうか？

- (1) 成瀬正成 (2) 平岩親吉  
(3) 安藤直次 (4) 渡辺守綱

## 解説

平岩氏の先祖は、古代には物部氏の一族でもあった弓削氏と伝えられています。三河国額田郡坂崎郷(幸田町坂崎)に居住しました。同地にある平らな巨岩に因んで「平岩姓」を称したと伝えられます。平岩親吉は家康公と同年であり、幼いころから近侍しました。家康公からの信頼も厚く、信康の傅役としても有名ですね。跡継ぎに恵まれませんでしたが、無理に養子を求めず、最後は無嗣断絶となってしまいました。信康の死が影響していたとも考えられます。



平岩親吉(平田院/名古屋市)

解答… (2)

## 問題86

現在の岡崎市小美町に生まれ、仏門に入ったものの、父や家督を継いだ弟が戦死し、家が絶えるのを惜しんだ家康公の命で還俗。駿府、江戸、京都の町奉行を歴任し名奉行と称えられ、後に京都所司代として活躍した三河武士は誰でしょうか？

- (1) 板倉勝重 (2) 奥平信昌  
(3) 土井利勝 (4) 本多正純

## 解説

三河の板倉氏は、板倉頼重がその祖とされており、子の好重と共に深溝の松平氏に仕えました。好重の二男が勝重です。長男の忠重は父と同様、深溝の松平氏に仕え、三男の定重が家督を継いで家康公に仕え、勝重は真宗の僧になりました。ところが定重が高天神城の戦いで戦死したことから、勝重は家康公の命で還俗、板倉家の家督を継いだのです。勝重は武人というよりも政治家としての能力を発揮し、関ヶ原の合戦以後、家康公に重用されるようになりました。京都所司代としては主に朝廷との交渉に従事し、幕府の権威を認めさせる働きをしたのです。



板倉勝重木像(長圓寺/西尾市)

解答… (1)

## 問題87

三河以外の出身ながら三河譜代に数えられ、赤備え軍団を率いて活躍。勤王の家で、代々、彦根藩主を務め、江戸期には4人の大老を輩出した一族は何氏でしょうか？

- (1) 井伊氏 (2) 高木氏  
(3) 堀田氏 (4) 柳沢氏

## 解説

幕府編纂の「寛永諸家系図伝」では、井伊直政を「開国の元勳」と記しています。直政の旧豊臣大名との外交力を高く評価したものでした。また幕末の大老 井伊直弼も「日米修好通商条約」を締結、同様に「開国の元勳」と評されています。井伊家は直政以来、徳川将軍家にとっては常に重要な政治的役割を果たしてきたと言えます。彦根井伊家の祖となった直政は、遠江国井伊谷の生まれですが、「藩幹譜」や「柳營秘鑑」によれば、「岡崎譜代」となっています。これは直政の父 直親が岡崎の家康公と誼を通じていたことが、岡崎譜代に値するという意味だと伝えられますが、実際は直政本人の譜代家臣筆頭の地位がそうさせたのでしょうか。



井伊直政木像(龍潭寺/浜松市)

解答… (1)

## 問題88

講談、歌舞伎、映画やテレビなどで「天下のご意見番」として知られる三河武士 大久保彦左衛門を紹介する内容として不適切なものはどれでしょうか？

- (1) 七代 松平清康に仕えた忠茂の孫で、忠員の八男、小田原藩主の忠世や沼津藩主 忠佐の弟にあたる。  
(2) 遠江平定戦から大坂の陣まで数々の戦いに参陣。大坂の陣では槍奉行、三代将軍 家光の代には旗奉行を務める。  
(3) 沼津藩主を継ぐことを断り、旗本として三河国額田郡に知行を得て、陣屋を現在の額田郡幸田町に置く。  
(4) 金山奉行を務め、後に老中になった大久保長安は従弟で、共に伊豆金山の開発と採掘量の増加に貢献した。

## 解説

大久保彦左衛門忠教は旗本として生涯を閉じています。知行地としては岡崎市内と幸田町地内があり、その陣屋が現在の八百富神社(幸田町)の位置になります。幸田町を「彦左の里」とする所以です。

大久保陣屋跡  
(八百富神社本殿/幸田町)

解答… (4)

**問題89**

東京の<sup>しんじゆく</sup>新宿の地名は、ある三河武士の広大な敷地内に甲州街道の新たな宿場が置かれたことに由来しています。関東移封後に関東総奉行、江戸町奉行、老中などを歴任し、子孫は<sup>たかとおはん</sup>高遠藩(長野県)で明治を迎えたこの三河武士は誰でしょうか？

- (1) 青山忠成 (2) 井上正就  
 (3) 大須賀康高 (4) 内藤清成

**解説**

新宿は本来「内藤新宿」と呼ばれていました。現在でもその地名は使われています。内藤家の屋敷地にそって甲州街道が通され、宿場町が出来上がった際に命名されました。内藤清成は弘治元年(1555)、三河国岡崎で出生、内藤忠政の養子となり、19歳で家督を継ぎました。浜松城で家康公に出仕します。後に秀忠の傅役を任されました。家康公の関東移封に際しては、清成は鉄砲隊を率いて江戸入りの先陣を務めます。その後、江戸町奉行、関東総奉行などを歴任し、関ヶ原合戦後には加増されて大名に列せられました。



内藤新宿  
 (模型・江戸東京博物館／墨田区)

解答… (4)

**問題90**

三河国幡豆郡小島村(西尾市小島町)出身。関東移封後は、関東代官頭として、検地、新田開発、河川改修に功績があり、特に江戸湾に流れ込んでいた利根川の付け替え工事は江戸発展の礎となりました。この三河武士は誰でしょうか？

- (1) 伊奈忠次 (2) 大久保長安  
 (3) 久世広宣 (4) 土井利勝

**解説**

関東各地には伊奈忠次を顕彰して、官職名の「備前」を付けた堀や堤防などがあります。水戸市には「備前堀」が現存し、橋の上には忠次の像が建てられています。忠次は三河国幡豆郡小島城(西尾市小島町)、伊奈忠家の嫡男に生まれました。父が三河一向一揆で門徒側についたため出奔、後に許されて三遠奉行の一人として検地などの代官であった小栗吉忠の同心となり、後に吉忠の跡を継ぐ形で代官衆の筆頭になりました。以後、家康公の五ヶ国総検地に大活躍し、関東移封後は関東代官頭として各地に名を残したのです。



伊奈忠次像(水戸市)

解答… (1)

## 問題91

永禄7年(1564)に三河国<sup>かりや</sup>刈谷に生まれ、若くして家康公に仕えますが<sup>しゅっほん</sup>出奔。諸国を渡りながら8名の主に仕え、帰参すると家康公の元で刈谷城主となり、その勇猛さから「鬼日向」と称され、後に備後福山藩(広島県)の初代藩主となった三河武士は誰でしょうか？

- (1) 大岡忠政 (2) 高木<sup>きよひで</sup>清秀<sup>かつなり</sup>  
 (3) 永井直勝 (4) 水野勝成

## 解説

水野勝成は各地を遍歴し武勇伝も多いことから、武功の人として捉えがちですが、元和偃武後に藩主となった福山では、その卓抜した城下町づくりでも顕彰されています。西日本が外様大名で占められていた中で、西国鎮守<sup>さいごくちんじゆ</sup>の任を帯びた譜代大名として備後国に入封、10万石の領主となりました。元和8年(1622)には、五重五層地下一階の天守閣をもつ巨城「福山城」を完成させ地名を「福山」と名付けました。また、芦田川デルタの干拓による城下町の建設をはじめ、綿花栽培の奨励による繊維産業の育成や、上水道の敷設、戦国時代以来荒らされていた神社仏閣の修理・再建など、領内の治政に力を尽くしています。(福山市ホームページより)



福山城天守(福山市)

## 問題92

小牧・長久手合戦の和議の条件により、羽柴秀吉<sup>はしば</sup>の養子(人質)に出されていた家康公の二男<sup>おき</sup> 於義丸<sup>まる</sup>(後の結城秀康)に小姓として付き従い、関ヶ原の合戦後、秀康が越前福井67万石の大名となると、付家老として越前府中城主となった三河武士は誰でしょうか？

- (1) 石川<sup>やすかつ</sup>康勝 (2) 小栗<sup>おぐりたまさ</sup>忠政<sup>とみまさ</sup>  
 (3) 鳥居成次 (4) 本多富正

## 解説

本多富正は、鬼作左で知られる三河譜代の重臣 本多重次の甥(兄の子)にあたります。豊臣秀吉のもとに人質として差し出された於義丸(後の結城秀康)に付き従い、後には秀康の側近として活躍するようになりました。関ヶ原合戦後、秀康が越前国に67万石の石高で入封され、福井城を築城、福井藩を立藩すると、富正にはその家老職が与えられます。ただし、家康公の計らいにより付家老として徳川家の直臣扱いとなり、越前府中城主となったのです。秀康が死去すると、富正は藩の執政を任されました。



越前府中城主表門(越前市)

**問題93**

三河武士の各一族のなかで、江戸時代、大名家13、旗本45家を有する最大の譜代門閥もんぼつとなったのは何氏でしょうか？

- (1) 石川氏                      (2) 大久保氏  
(3) 榊原氏                      (4) 本多氏

**解説**

多くの三河武士の一門のなかで、最も多くの大名や旗本を輩出したのは本多一族です。本多氏は岩津譜代とも伝わる古くからの譜代家臣で、いくつかの家に分かれますが、代表的な家は次の五家といわれます。

- 平八郎家……徳川四天王に数えられる本多忠勝の家系で、宗家は三河岡崎藩で明治を迎えました。
- 作左衛門家…三河三奉行で知られる本多重次の家系で、越前丸岡藩主になりますが、子孫は旗本となります。
- 弥八郎家……家康公の参謀ともいわれる本多正信の家系ですが、宗家は改易。子孫は旗本として残ります。
- 豊後守家……田原城主となった本多広孝の家系で、最初の岡崎藩主家。子孫は信濃飯山藩主で明治を迎えます。
- 彦八郎家……東三河伊奈城主の家系で、宗家は近江膳所藩ぜぜで明治を迎えました。

解答… (4)

**問題94**

三河武士(徳川・松平一門は除く)たちが江戸期を通して治めた市町数が二番目に多いのは愛知県ですが、一番多い県はどこでしょうか？ 安房・上総あわかず・下総しもとうさと呼ばれた地域です。

- (1) 岡山県                      (2) 静岡県  
(3) 千葉県                      (4) 三重県

**解説**

江戸期を通して、幕府にとって信頼のける大名たちは、何といても三河譜代の大名たちでした。彼らは禄高は大きくないものの、將軍家の近くに知行地を持ち、いざという時には江戸を守ることを求められていました。そのため、三河武士が治めた町は、現在でも東京周辺が多く、次に名古屋周辺、畿内では京都周辺が多かったと言えます。ただし配置換えが進んでいくと、三河譜代の大名たちも次第に全国に展開するようになりました。幕末時点では、その数はおよそ120家ほどあったと考えられています。



かづさひょうごほんまふね  
上総請西藩真武根陣屋遺跡(千葉県木更津市)

解答… (3)

## 問題95

三河武士という概念に、家康公と一枚岩の強固な絆が語り継がれてきました。彼らを引き付ける松平家の当主には、三つの要素、「武勇(統率力)」「情愛」「慈悲(寛容)」が備わっていたと、大久保彦左衛門は書き記しています。しかし、歴代の松平家当主のなかで、この三つがいずれも欠けていた、と彼が酷評しているのは誰でしょうか？

- (1) 五代 長忠                      (2) 六代 信忠  
(3) 七代 清康                      (4) 八代 広忠

## 解説

三河物語を著わした大久保彦左衛門は、先祖の大久保家がどのような活躍をしてきたのかを伝えようとしてきました。大久保忠茂が恩賞を授けられたのは、松平七代 清康の時です。六代 信忠が一族家臣たちの内訌を生んだのは、次の跡目を弟の桜井松平信定にしようとしたからだとも伝えられます。清康ひいきの大久保家にとっては、とんでもないことだったのでしょう。信忠や信定に対しては酷評をしている理由と考えられます。



東照山称名寺(碧南市)

解答… (2)

## 問題96

令和元年(2019)11月、岡崎の玄関口のひとつ、名鉄 東岡崎駅の北口デッキに「家康公の騎馬像」が設置されます。これは、松平竹千代だった家康公が、三河の国の大名として認められ、「徳川家康」を名乗った頃の年齢をイメージして制作されています。家康公が“徳川家康”を名乗ったのは何歳のときだったのでしょうか？

- (1) 25歳                              (2) 35歳  
(3) 45歳                              (4) 55歳

## 解説

家康公は幼少期を「竹千代」、14歳で元服時には「元信」、17歳で初陣の際に「元康」と名前を変えてきました。それぞれに意味のある名でしたが、22歳の時には今川家との決別を示すために「家康」と改めます。この「家」は源氏の棟梁であった八幡太郎源義家から一字を取ったということです。この当時から大名になることを目指し、実現した時には「源氏」を名乗りたいと考えていたのでしょう。25歳の時、東三河の平定を実現すると、姓を新田源氏の末裔である徳川に複することを裁可され、戦国大名 三河守徳川家康が誕生したのです。

家康公騎馬武者像  
(岡崎市)  
制作 神戸峰男  
撮影 山崎兼慈

解答… (1)

## 問題97

慶長20年(1615)、大坂夏の陣によって、豊臣氏は滅びます。すべての戦いの火種を消し去り、若き日の志を成し遂げた家康公は平和な時代の始まりを告げるべく元号を改めました。その元号は次のうちどれでしょうか？

- (1) 元和 (2) 天和  
(3) 明和 (4) 令和

## 解説

元和という元号は、もともとは唐の時代に使われたもので、大変優れた国王による治政がなされていた「吉例」から採用されました。これは家康公が平和国家創造の吉例にしたいという強い願いがあったからだと伝えられています。大坂夏の陣という「国家の災難」があったことを憂い、元号を変えるという決断に至ったと伝えられます。改元により「元和偃武」という幕府の平和への強い願いを内外に示したのです。150年間続いた戦国時代の終焉です。



大坂夏の陣(東照社縁起絵巻)

解答… (1)

## 問題98

明治維新から77年の歩みが国を滅ぼしました。太平洋戦争に敗れた日本。その時、日本人はみな茫然自失の時。作家 山岡荘八氏も同じ。その時、これからの日本人が総意で取り組むべきテーマは「平和」だと思いました。そしてある人を主題に小説に挑みました。ある人とは誰でしょうか？

- (1) 明治天皇 (2) 織田信長  
(3) 豊臣秀吉 (4) 徳川家康

## 解説

山岡荘八氏は「小説徳川家康」を執筆するにあたって、家康公を「平和への求道者」と位置付けました。これは彼自身が従軍作家として、太平洋戦争の悲惨さを目の当たりにしてきたからに他なりません。国家というものの矛盾が、人と人を殺しあいの世界に落とし込んでしまう恐ろしさを、肌で感じてきたのです。小説徳川家康は北海道新聞で連載が始まりましたが、やがて中日新聞などに拡大、大ヒットとなりました。平和な国家を求める日本人の意思が、家康公の生き方を通して具体的になっていったのです。



初期のころの文庫「徳川家康」

解答… (4)

